

本庄市埋蔵文化財調査報告 第12集

埼玉県本庄市

旭・小島古墳群発掘調査報告書 I

—堂場1～9号墳—

本庄市教育委員会

本庄市埋蔵文化財調査報告 第12集

埼玉県本庄市

あさひ おじま
旭・小島古墳群発掘調査報告書 I

—^{どうぼ}堂場 1～9号墳—

本庄市教育委員会

序

『本庄市史』の監修の労をとられている小野文雄先生は「タマ」は多摩、埼玉など政治の中心を示す呼称で「コダマ」は小さな政治の中心であろうとの説を示されている。事実極めて狭いこの地域に3郡が置かれ、当地域が社会的発展の進んでいた土地柄であるともいえましょう。

長い沈滞ムードから内需拡大のきざしのみえる今日この頃、開発事業も増大化の傾向にあり、そんなおり旭・小島古墳群域内に埼玉県県住宅供給公社による「おじま台住宅」が計画されました。

本書はその発掘調査の成果をまとめたものですが、近年考古学がマスコミに取りあげられる例も増えております。今回の成果は決してマスコミに取りあげられるようなものではありませんが、猛暑のなか黙々と作業に従事し考古学の基本にたちかえった調査を実施してくれました。

本書によって社会的発展が進んでいた当時の一端でも知ることができれば幸いです。

最後にいろいろと御指導いただいた埼玉県教育局指導部文化財保護課の皆様方、いろいろと御配慮いただいた埼玉県住宅供給公社、直接本書の刊行のため執筆と編集の労をとられた佐藤好司、井上富美子、埋蔵文化財センターの諸氏に心からお礼申し上げます。

昭和63年3月10日

本庄市教育委員会

教育長

坂本敬信

例 言

- 1 本報告書は、埼玉県住宅供給公社の委託を受けて、本庄市教育委員会が調査主体となり昭和62年度に実施したおじま台住宅建設事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は今後の旭・小島古墳群の調査に鑑み、『旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅰ』とし今後の同古墳群の調査に対応する。詳細については、本文Ⅰ－3を参照されたい。
- 3 発掘調査は、長谷川・増田の指導、指揮のもと佐藤が現地指揮を取った。尚、井上の補佐を得た。調査組織は別掲のとおりである。
- 4 発掘調査は、試掘調査の所見を基に、重機(0.4ユンボ)を導入して表土の排除を行い、遺構を確認しつつ行った。尚、排土の関係で調査区を南北に二分して行った。
- 5 実測は中央航業株式会社に委託して取り付けた座標を基準に、セオドライト(測機舎 TM20D)を使用して10m毎に打杭し1mグリッド(五寸釘使用)を設定して行った。標高は中央航業株式会社の設定したベンチマークからレベル(測機舎 B2)を使用し測定した。作図作業は主に長谷川・増田・早野・井上・佐藤が行い、作業員の補佐を得た。
- 6 遺物・発掘調査における写真は佐藤・井上が撮影した。
- 7 出土品の整理、実測、図版の作成や遺物の観察は長谷川の指導のもと佐藤の指示に従い以下の分担で本庄市埋蔵文化財センターにて行った。

遺物の水洗・註記・復原	長谷川・関根・津久井
遺物の実測	佐藤(土器)・井上(金属製品)・増田(石器)
図版トレース	井上・関根・佐藤
- 8 本書の執筆は増田・佐藤・井上で行い、それぞれ文末に記した。編集は佐藤・井上が行い、長谷川・増田が監修した。
- 9 本書に掲載した遺構実測図、写真、出土遺物は本庄市埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 文化庁長官に提出した「埋蔵文化財発掘通知」および文化庁受理番号は以下のとおりである。

遺跡名	旭・小島古墳群、所在地	本庄市小島3丁目399番1他、面積	7848m ² 、通知番号	本	
				教社発第96号 昭62・4・17付、文化庁受理番号	62委保記第2-2159号 昭和62年8月6日
- 11 本書における実測図および観察表は以下の凡例による。
 - 1) 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。また平面図の北は座標北である。

古墳平面図	1:100	土層図	1:80	土器	1:4
-------	-------	-----	------	----	-----
 - 2) 遺構実測図のスクリーントーンは、斜線がローム層を、網目が攪乱を表現している。
 - 3) 土器実測図における断面のスクリーントーンは須恵器を表す。
 - 4) 土器実測図中の矢印は調整の方向を表し、断面側のヒゲは土師器の場合はヨコナデの範囲を、須恵器の場合はケズリの範囲を示す。
 - 5) 土器実測図の中心線の一点破線は適宜回転して実測したもので、口径の一点破線は口径円

周が $\frac{1}{2}$ 以下のものである。

- 6) 須恵器の観察にあたっては酒井清治氏より御教示を得た。
- 7) 遺物観察は、1 法量、2 胎土、3 成形、4 整形、5 形態、7 色調、8 使用痕、9 出土状況、10 接合関係、11 備考の順に記述しそれぞれ頭文字で表した。個々の項目及び用語については『社具路遺跡発掘調査報告書』に準拠したが、一部修正した。
- 8) 胎土中の粒子の分類は以下の基準による。
径 1 mm 以下……微砂、径 2 mm 以上 4 mm 以下……砂粒、径 5 mm 以上……小石
- 9) 色調の傾向は以下を基本に明暗で細分した。
(赤) 赤褐色 > 橙褐色 > 黄褐色 > 黄白色 (黄)

- 12 発掘調査、整理、報告書の作成にあたり、次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

外尾常人	鈴木徳雄	丸山 修	岡本幸男	坂野和信	坂本和俊
酒井清治	栗原文蔵	早川智明	横川好富	小川良祐	梅沢太久夫
井上 肇	恋河内昭彦	杉崎茂樹	篠崎 潔	金子彰男	柴崎起三雄
岡田賢治	平田重之	大沢常夫			

特に、塩原正美、テイ御夫妻、塩原恭平氏には便宜をはかっていただいた。

- 13 発掘調査、整理及び報告書作成の組織は下記のとおりである。

主体者 本庄市教育委員会

教育長	坂本敬信
社会教育課	
課長	荒井正夫
課長補佐兼文	
化財保護係長	小林弘子
社会教育係	斎藤みゆき (庶務)
文化財保護係	長谷川勇
	増田一裕
	早野秀之
担当者	長谷川勇
	増田一裕

担当者補助 佐藤好司

井上富美子

作業員	荒井幸太郎	笠本源一	笠本作治	八木道良	町田惣吉
	川田由貴夫	久保博久	関根典子	久保田かづ子	渡辺宜子
	大谷八重子	我妻きよみ	日向みどり	津久井八重子	久保綾子
	上田みさほ	石原満津江	柳 定恵		

目 次

序

例 言

目 次

I 発掘調査の契機と経過

- 1 調査に至る経過…………… 1
- 2 調査の経過…………… 1
- 3 調査の方法…………… 2

II 遺跡をとりまく環境

- 1 旭・小島古墳群概観…………… 5

III 堂場地区の調査

- 1 遺構と遺物…………… 9
- 2 ま と め……………51

写真図版

あとがき

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡の位置図…………… 4
- 第2図 基本土層図…………… 5
- 第3図 旭・小島古墳群分布図……………7、8
- 第4図 堂場1号墳出土遺物…………… 9
- 第5図 堂場1号墳土層図・エレベーション図……………10
- 第6図 堂場2号墳出土遺物……………11
- 第7図 堂場2号墳土層図・エレベーション図……………13、14
- 第8図 堂場3号墳土層図……………13、14
- 第9図 堂場4号墳土層図……………13、14
- 第10図 堂場2号墳遺物接合関係図……………15、16
- 第11図 堂場3号墳出土遺物……………17
- 第12図 堂場4号墳石室……………20
- 第13図 堂場4号墳遺物接合関係図……………21、22

第14図	堂場4号墳出土遺物	23
第15図	堂場5号墳土層図・エレベーション図	26
第16図	堂場5号墳遺物接合関係図	27
第17図	堂場5号墳出土遺物	28
第18図	堂場6号墳出土遺物(1)	29
第19図	堂場6号墳土層図	30
第20図	堂場6号墳遺物接合関係図	31、32
第21図	堂場6号墳出土遺物(2)	33
第22図	堂場7号墳出土遺物(1)	37
第23図	堂場7号墳土層図	38
第24図	堂場7号墳遺物接合関係図	39、40
第25図	堂場7号墳出土遺物(2)	41
第26図	堂場8号墳出土遺物	44
第27図	堂場9号墳出土遺物	45
第28図	堂場8・9号墳土層図	46
第29図	堂場地区その他の遺物(1)	49
第30図	堂場地区その他の遺物(2)	50
附 図	1 旭・小島古墳群堂場地区全測図	
附 図	2 堂場1号墳	
附 図	3 堂場2号墳	
附 図	4 堂場3号墳	
附 図	5 堂場4号墳	
附 図	6 堂場5号墳	
附 図	7 堂場6号墳	
附 図	8 堂場7号墳	
附 図	9 堂場8号墳	
附 図	10 堂場9号墳	

写真図版

写真図版	1 堂場1号墳	堂場1号墳土器出土状況
写真図版	2 堂場2号墳	堂場2号墳土器出土状況
写真図版	3 堂場3号墳	堂場3号墳磔検出状況
写真図版	4 堂場4号墳	堂場4号墳磔検出状況

- 写真図版 5 堂場4号墳石室 堂場4号墳石室棺床面
- 写真図版 6 堂場4号墳土器出土状況 堂場4号墳土器出土状況
- 写真図版 7 堂場5号墳 堂場5号墳土器出土状況
- 写真図版 8 堂場6号墳 堂場6号墳磔検出状況
- 写真図版 9 堂場6号墳土器出土状況 堂場6号墳耳環出土状況
- 写真図版 10 堂場7号墳 堂場7号墳土器出土状況
- 写真図版 11 堂場7号墳土器出土状況 堂場7号墳土器出土状況
- 写真図版 12 堂場8号墳 堂場8号墳土器出土状況
- 写真図版 13 堂場8号墳土器出土状況 堂場9号墳
- 写真図版 14 堂場3・4号墳 堂場地区北半全景
- 写真図版 15 出土遺物
- 写真図版 16 出土遺物

I 発掘調査の契機と経過

1 調査に至る経過

旭・小島古墳群は、群として価値の高い遺跡として埼玉県選定重要遺跡に指定されている。本庄市教育委員会の直営で、各種開発行為に先立ち、発掘調査を実施することとなった経緯については、同古墳群内にかかる御手長山古墳の破損事故に端を発する。以来、本庄市では国庫補助金を得て、分布調査、試掘調査、発掘調査等を実施してきた。

このような中で、同古墳群の範囲である小島、下野堂、万年寺地区にかかる諸開発行為は、年を追って増加しており、事業内容は主として大型店舗建設、大規模宅地開発、工場建設等に加えて、公共の土地区画整備事業も軌道に乗りつつある。これらは常に埼玉県教育委員会と本庄市教育委員会で対処され、保存措置が講じられて今日に至っている。

本庄市小島3丁目399番1他の土地に、住宅団地開発のため、日世株式会社東京支店代表取締役野上清光氏より、埋蔵文化財の取扱いについての協議書が、本庄市教育委員会へ提出されたのは、昭和62年1月10日のことであった。これに対し、本庄市教育委員会は旭・小島古墳群の範囲内にあたり古墳址の存在が予想されるため、昭和62年1月12日付本教社発第21号で、文化財の所在についての回答文書を返送した。その後の協議で試掘調査及び、発掘調査が避けられない状況となり、原因者負担により事業主体者である埼玉県住宅供給公社と、本庄市教育委員会との間で委託契約書が締結され調査が実施されることとなった。試掘調査の結果、事業予定地内には古墳址が9基前後存在することが確認され、昭和62年4月17日より全面発掘を行った。(増田)

2 調査の経過

4月17日～30日

上旬より調査の準備を整え、17日より重機を導入し発掘区内の桐の木の伐採作業に入る。18日午後より表土除去に入る。排土置場に苦慮するが調査区を2分し、北側約 $\frac{1}{2}$ を前半分として行い、排土は南側の空間地に置くこととする。表土除去に併せて、2号墳墳丘部より本格的な調査を開始する。須恵器、土師器片が若干検出されたが、攪乱を著しく受けている。墳丘部の検出に目安を付け、周溝北側から区分し検出に着手する。ブリッジ寄りに須恵器が主体の土器集中区を確認する。周溝検出に併せて順次、土層図作成、撮影を行う。2号墳周溝精査、1号墳周溝を北側から区分し、検出にかかり、須恵器大甕の破片を検出する。27日までに前半部の重機による表土除去を終了する。

5月1日～16日

1号墳及び2号墳周溝の検出。1号墳土層図作成、撮影。2号墳遺物出土状況図作成、撮影、8日より4号墳墳丘部の検出に着手し、石室と思われる石材を確認する。9日座標の取り付けを行う。座標を基準に10mグリットを設定する。

5月18日～23日

1号墳、2号墳の検出に大まかな目安を付け、4号墳の検出に尽力し、周溝内に土器片集中区、礫群を確認する。墳丘部の実測図作成、撮影を行う。21日より3号墳周溝を北側から区分し、検出に着手する。周溝は一部調査区外にかかるが、北側にブリッジをもつ方墳になると思われる。

5月25日～31日

2号墳コンタ図、エレベーション図作成。3号墳周溝内より須恵器大甕の破片、4号墳周溝内より馬形埴輪の鈴部分を検出する。3号墳、4号墳の実測、撮影を行う。3号墳周溝部は当初の予測に反し、掘り込みが深く検出に苦慮する。

6月1日～13日

3号墳周溝検出に併せて、1号墳、2号墳、4号墳の実測及び撮影、1号墳、2号墳の遺物取り上げを行う。2日より5号墳のプラン確認後北側から区分、検出に併せて順次、実測、撮影を行う。9日より6号墳墳丘部の検出にかかり、鉄製品、土師器破片を検出し撮影を行う。6号墳周溝プラン確認後北側より区分し検出に着手、土器片集中区、礫群を確認する。

6月15日～30日

15日より重機を導入し、南側後半部の表土除去に入る。6号墳周溝内の土層図作成、撮影、遺物の出土状況図作成を行う。5号墳遺物取り上げ、コンタ図及びエレベーション図作成、全景撮影を行う。表土除去に伴い北半調査区の全景撮影及び2号墳コンタ図作成を行う。22日より7号墳プラン確認後北側より区分し、検出に着手、須恵器を中心とする土器片集中区を確認する。4号墳の精査を行う。6号墳出土状況図及び礫群実測図作成に手間取る。

7月1日～18日

7号墳周溝土器片集中区出土状況図作成、土層図作成、撮影を行う。6号墳墳丘部及び周溝部礫群のレベリング、遺物の取り上げを行う。南半分のグリットを設定する。7日堂場地区の基本土層図作成及び撮影を行う。11日より8号墳のプラン確認後、検出に着手する。3号墳、4号墳出土遺物の撮影を行う。18日までに南側の重機による表土除去を終了する。桐材の切断、撤収を行う。

7月21日～31日

8号墳の精査。4号墳石室、周溝礫群の実測及びレベリング、遺物の取り上げを行う。3号墳、7号墳のコンタ図作成及び遺物の取り上げ。29日より9号墳の検出に着手するが、遺構の大部分は調査区外にかかる。全行程におおまかな目途を付け、作業員を縮少し能率的に作業を実施する。

8月1日～14日

4号墳石室、6号墳土器群の実測に苦慮しながらも、残された実測図の作成に主力を注ぐ。8号墳、9号墳の土層図及びコンタ図作成、撮影を行う。全実測図の補足、遺物の取り上げ、最終撮影を行う。13日より埋め戻しのため重機を導入する。14日、4号墳石室棺床面下立ち割り及び礫取りはずしを行う。機材を撤収する。猛暑の中、作業に奔走されながらも、参加者全員が一丸となり、14日までに全ての現地調査が終了した。
(井上)

3 調査の方法

今回の調査地は、所謂旭・小島古墳群に包括されるが、1978年に報告された『御手長山古墳発掘調

査報告書』、1982年に報告された『旭・小島古墳群緊急調査報告書』では、1基の古墳址の所在が記されていたにすぎなかった。しかし、試掘調査を行ったところ、8～9基の古墳址の存在が予想された。時期的には、埴輪が採取されなかったことや、若干出土した土器片などからみても終末期の古墳であろうと予想された。

調査は国土座標をもとに調査区内に10mグリットを設定しておこなった。尚、調査区外に排土置場が確保できず、調査区を南北に二分し北側より調査に着手した。

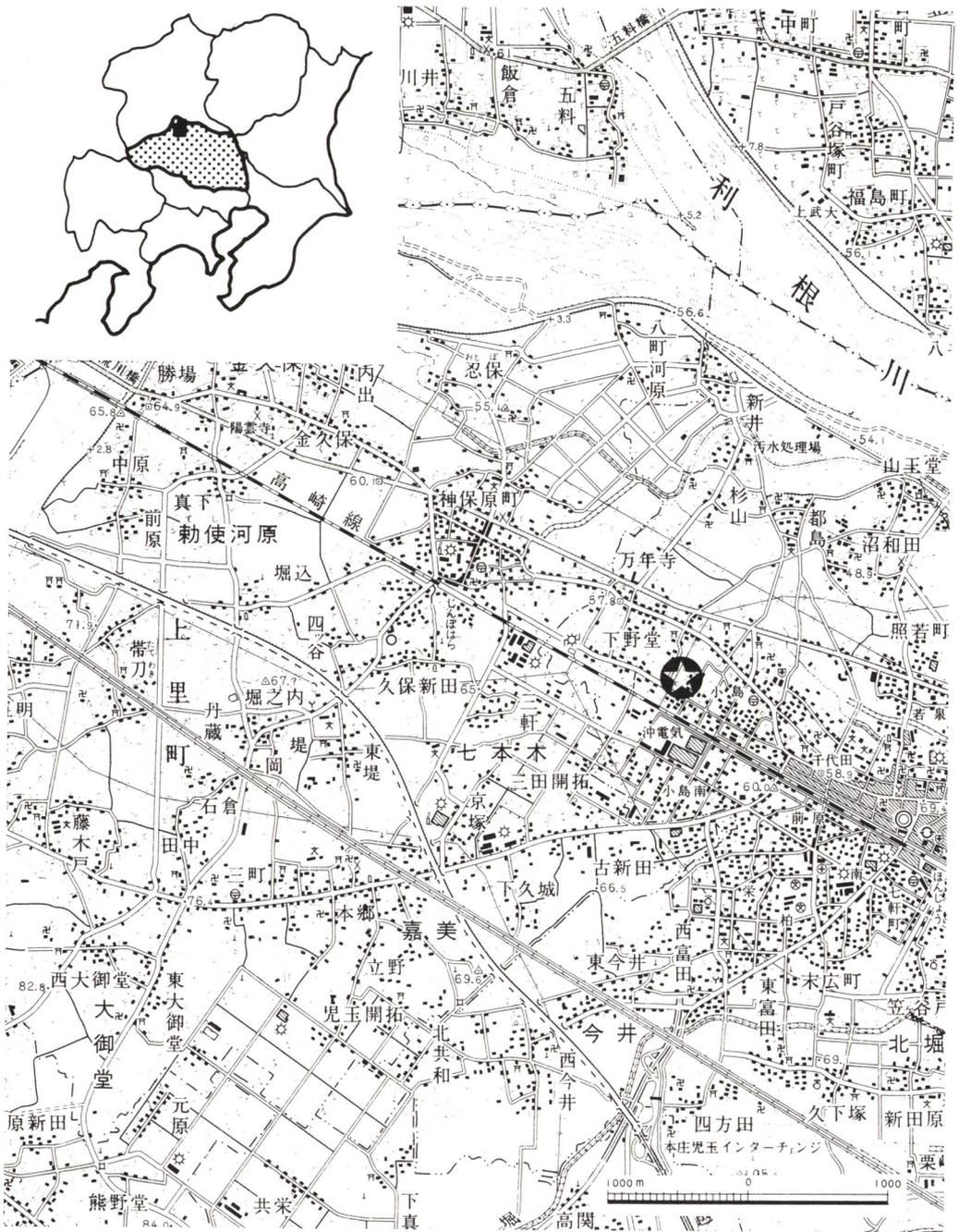
遺跡名については、今後予想される旭・小島古墳群内の調査に鑑み、小字を単位として地区を設定し、地区毎に古墳番号を付与することとし、将来調査が進んだ段階で改めてグルーピングすることにした。したがって、当面は旭・小島古墳群〇〇地区×号墳と呼称し、本報告書もそれに準拠した。

また、調査前に試掘調査の成果を基にし、担当者・担当者補助員の間で調査方法について協議し、将来的に予想される土地区画整理事業に係る発掘調査をみすえ、調査方法の開拓・確立を含め、幾つかのテーマを設定して調査に臨んだ。

1つは、遺構の10cmコンタによる実測である。遺構をコンタによって表現することは別段真新しいことでもなく、10cmコンタによる実測も写真測量の普及した昨今では決して珍しいことではなくなった。しかし、今回敢えてテーマの1つに取り込んだのは、遺構の上端、下端のみの実測では作図者によって測点に個人差が表われてしまい、厳密な意味での遺構図の精度が維持できないこと、また、今回のような終末期の古墳の周溝の場合、不定形なものも多く、粗いコンタでは表現しきれないであろうことが予想されたためである。コンタによる実測にはデメリットも存在するが、遺構を客観的に表現するには有効であり、同一の土俵にあげて検討するには有用であると思われる。

もう1つは、出土遺物の層位的把握である。今回の調査では全ての遺物の取り上げに際し、絶対高の記録とともに、出土層位の記録も行った。

考古学においては、出土遺物の遺構における位置付けは立面的位置付けと平面的位置付け、即ち三次元的位置付けによってなされるが、立面的位置付けには絶対高を用いることが多い。特に、近年の調査では遺構の平面的位置付けに国土座標を用いることが多く、出土遺物は国土座標上に数値によって置き換えられ記録される。しかし、現実の遺構を振り返ったとき平面的位置付けは別として、立面的位置付けに絶対高のみを用いることに常々疑問を感じていた。遺構の埋没が自然堆積による場合(火山の爆発や河川の氾濫などによる特殊な埋没状況の場合は別として)、その堆積状況は外側が高く内側に低い凹レンズ状を呈することは誰でも知っている事実である。即ち、遺構の埋没課程で遺物が混入した場合、遺構の内側まで転落した土器と外側で止まってしまった土器とでは、同一のタイミングで混入しても絶対高で表現すれば、前者は低く後者は高くなる。遺構の底面により近い遺物はその時間的位置を示すとすれば、同一層内に存在しながら前者が後者より遺構の時間的位置を知る手掛かりとして重要なものになるという矛盾を引き起こすことになる。したがって、遺物の層位的把握は基本的かつ重要なことであると考えられる。今回は古墳址の調査ということもあり、その成果は必ずしも直接的に反映されたわけではなかったが、住居址の調査にあたっては共伴遺物と混入遺物とを分離する手掛かりとして有用な手段であると思われる。(佐藤)



第1図 遺跡の位置図

II 遺跡をとりまく環境

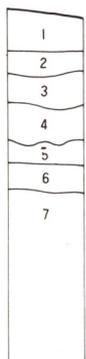
1 旭・小島古墳群概観

旭・小島古墳群は本庄台地の北縁―神流川扇状地の扇端部に位置し、本庄市小島から上里町神保原にかけて分布している。神流川扇状地の扇端部は上里町神保原～金久保付近では比較的緩やかに利根川（烏川）の沖積地である妻沼低地へと移行していくが、本庄市万年寺以東では段丘崖を呈し比高4～12mを測る。この段丘崖が旭・小島古墳群の分布の北縁を規定している。西限は御陣場川、東限は律令期の児玉郡と賀美郡との郡境と考えられる仕切沢に求めることができる。

この周辺は『和名類聚抄』による小鴨郷に比定されるが、比較的古くから開発が行われた場所であり、下野堂からは弥生時代中期の土器が採取されている。前後するが三杵山古墳からは尖頭器・舟底形石器、石神境遺跡からはナイフ形石器が出土しており、該期の遺跡の存在を暗示している。また、段丘崖に沿って土師器の散布地が広がっており、古墳時代以降の集落の存在が推定される。この内の小島本伝遺跡からは和泉期の住居址が確認されている。

旭・小島古墳群の成立を考える上で無視できないのが下野堂遺跡の方形周溝墓群である。12基の方形周溝墓と2基の円形周溝墓が検出されている。詳細は未報告のため不明であるが、調査者は和泉期のものとしている。しかし碧玉製石釧の出土を重視すれば五領期に遡る可能性も考えておかなければなるまい。方形周溝墓は調査区の北半分に集中しさらに北側に延びるものと思われる。この北東30mには周溝内径40mの八幡山古墳が存在し、墳形は現状からは方墳ともみえるが、昭和56年の調査によれば周溝は円形に巡っており円墳と考えられる。主体部は組合せ箱形石棺であることが知られており、埴輪の樹立が認められないことや方形周溝墓群に近接することから5世紀前半の築造と考えたい。三杵山古墳は周溝内径67mを測る円墳であり竪穴系主体部の存在が推定され、八幡山古墳同様埴輪の樹立が認められないことや、周溝内から出土した和泉期の甕等から八幡山古墳に続く時期のものとして理解

堂場地区基本土層



- 1層 表土 浅間Aスコリアを多量に含む ふかふかしてしまりなし
- 2層 暗茶褐色土層 火山灰含みサラサラする Aスコリア降下以前の表土か？
- 3層 ソフトローム（黄褐色土層） 白色スコリア粒子含む 4層より暗い
- 4層 ハードローム（黄褐色土層） 径2～5cm大の礫を若干含む 3層より明るい3層より固くしまるが5層程しまらない
- 5層 ハードローム（黄褐色土層） 白色スコリア粒子含む 径1～2cm大の礫を含む ガラス質状の鉱物含む
- 6層 ハードローム（淡茶褐色土層） 4層より若干暗い 基本的に5層と変わらないが径5cm以上の礫を含む 7層の暫移的性格か？
- 7層 砂礫層 色調の異なる砂礫が互層に堆積する 下層にいく程砂の堆積厚い

第2図 基本土層図

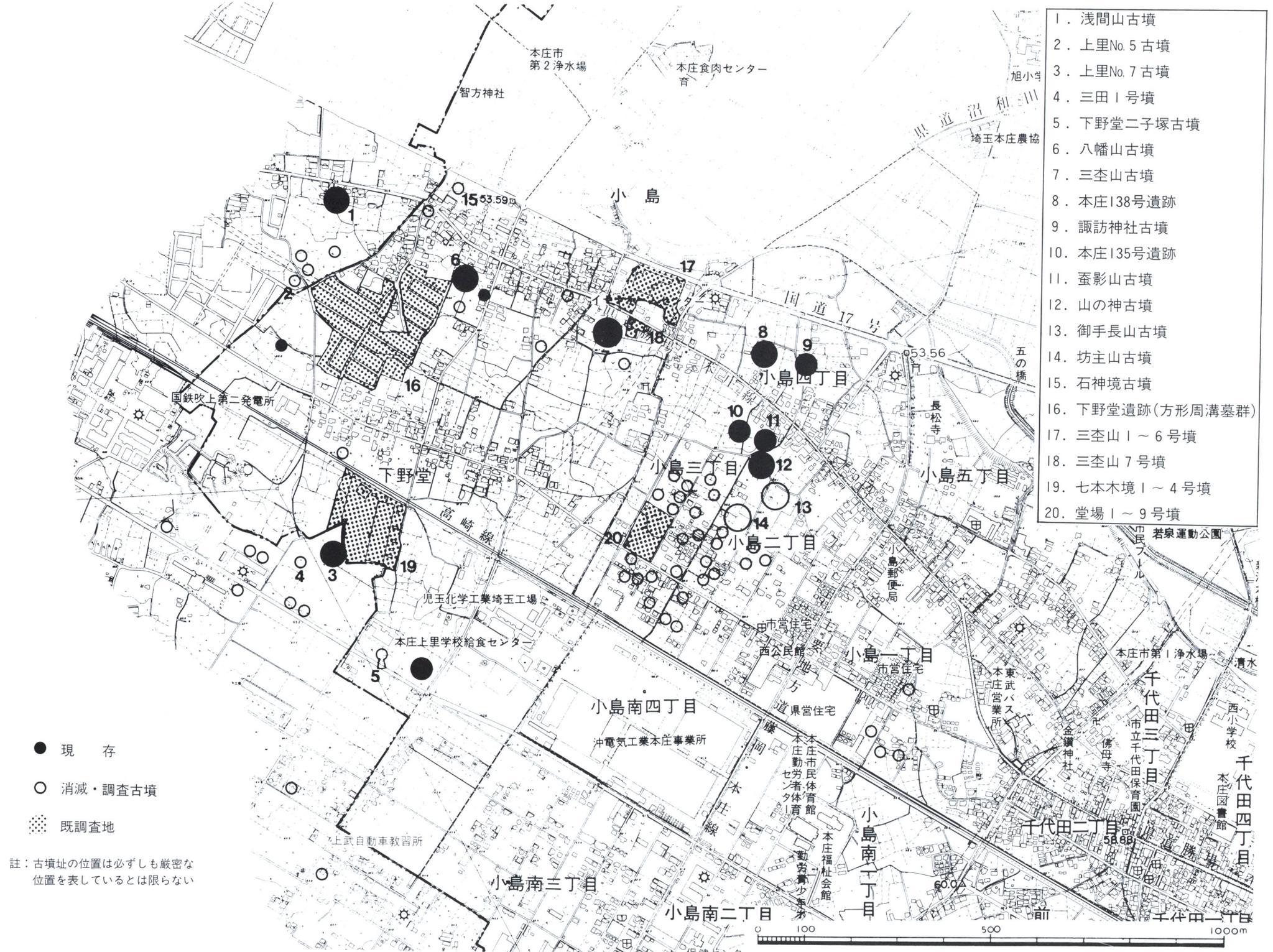
しておきたい。三奈山古墳の北東に存在する三奈山2号墳は径22mの円墳であり、B種コヨハケをもつ円筒埴輪が出土し、埴輪や伴出した土師器塚から5世紀第IV四半期の時期が考えられる。現状では旭・小島古墳群内における最も古い埴輪であるが、児玉地域における定形化した埴輪の出現は5世紀第II四半期に比定される児玉町金鑽神社古墳に求められることから、今後、三奈山2号墳より遡る時期の埴輪が確認される可能性もある。三奈山1号墳は径19mの円墳で礫檜を主体部にもち、礫檜内からの遺物の出土は皆無であったが、埴輪は普通円筒に2次調整を欠き、朝顔形埴輪の一部に肩部にコヨハケを施すものがあり、三奈山2号墳に続くものと考えられる。三奈山3～6号墳は径10m前後の小円墳であり埴輪の樹立は認められなかった。しかし出土した土器は三奈山1・2号墳と大差ない時期のものが含まれており、古墳の規模によって埴輪の樹立が制約されたものとみることができないであろうか。

6世紀前葉の古墳については三奈山1号墳の他に本庄No130遺跡(径20m以上の円墳)が確認されているに過ぎず、その様相は不明である。6世紀中葉に位置付けられるものは、三奈山7号墳、石神境古墳である。三奈山7号墳は全長29mの帆立貝型古墳で、円筒埴輪の他、人物・馬等の形象埴輪も出土している。周溝内からは角閃安山岩が多く検出されており、角閃石安山岩の横穴式石室を主体部にもつ可能性がある。石神境古墳は径16mの円墳である。西側のブリッジを挟んで人物・馬・家等の形象埴輪樹立が認められている。両古墳の円筒埴輪には半円形の透孔のものが含まれており古い様相を呈している。

6世紀後葉～未葉に位置付けられるものとしては埴輪の面からの御手長山古墳の他、坊主山古墳、上里No.5古墳等が上げられず、いずれも角閃石安山岩積みの横穴式石室を主体部にもち埴輪の樹立が認められている。御手長山古墳は直径42mの大型円墳で主体部より、銀製弭や直刀、鉄鏃、金環、ガラス小玉、須恵器等が出土している。特に銀製弭は周辺でも行田市八幡山古墳や高崎市観音塚古墳等の大型古墳からの出土が確認されたにすぎない。

7世紀以降の終末期に位置付けられるものは今回調査した堂場地区や、七本木境地区、下野堂遺跡(上里地区)、でまとまって確認されたほか、浅間山古墳、三田1号墳、本庄No.129遺跡等があげられる。このなかで浅間山古墳は径35m前後の円墳と考えられ、角閃石安山岩積みの横穴式石室を主体部にもち、現状では埴輪が認められないことや、石室内から出土した須恵器から中葉に位置付けられ、該期の円墳としては大型のものである。堂場地区や七本木境地区からは8世紀に降りうる土器も確認されてはいるが、追葬による祭祀の継続を考慮すれば古墳の築造は7世紀の段階で終焉するものと考えられる。

以上のように旭・小島古墳群の変遷は一貫して大型円墳を軸としていることに特徴がみられる。前方後円墳は下野堂二子古墳が確認されているにすぎず、今後、調査が進めば小規模のものが確認される可能性もあろう。また、堂場3号墳のように終末期の方墳も確認されており、その変遷はより複雑なものであったと思われる。現状では、下野堂遺跡の方形周溝墓群を核として外側に拡散する変遷をたどるようである。今のところ上里地区では5世紀代に遡る古墳の存在は確認されておらず、東方向に変遷の軸があったものと考えられる。上里地区の造営開始は早くても6世紀後半になるものと思われる。尚、紙数の都合で参考文献は割愛した。(佐藤)



第3図 旭・小島古墳群分布図

III 堂場地区の調査

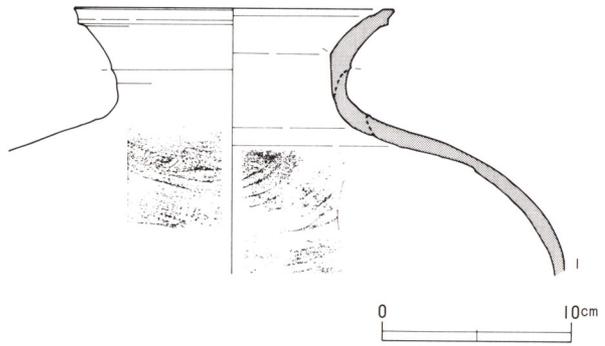
1 遺構と遺物

1号墳 (第4・5図、附図2、写真図版1・15)

1号墳は調査区の東隅に存在、北西部で3号墳と接する。半分は調査区外で全容は不明である。

周溝は北東、北、南側で途切れブリッジになるものと推定される。南側ブリッジが石室開口部に相当するものと推定される。北東ブリッジの先端は表土排除中に誤って削平してしまったが、断面観察によれば周溝が延びる様子も窺えず、調査区内で立ち上がるものと推定される。周溝幅は最大で7.1m、最小で2.1mを測る。周溝内端部のラインは直線を基調としており、墳丘形態が方形となる可能性も考えられるが、完掘していないため不明である。コンタラインを観察すると周溝はこの直線を単位にいくつものまとまりを見出すことができ、それぞれ摺鉢状に深い部分をもつ。最も深いのは南西部の周溝であり、確認面からの深さは0.7mを測る。これらはそれぞれを1つの単位として周溝掘削の作業単位となる可能性もある。周溝内からは主として2層中より、拳大から人頭大の河原石が内側より転落する状況で確認されており、葺石の施設を推定することができる。石材の出土が特に目立ったのは北東及び南側の周溝であったが、南側の周溝内の石材は主体部に使用された石材が転落した可能性もある。

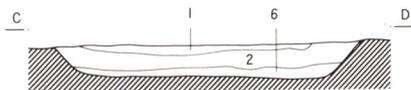
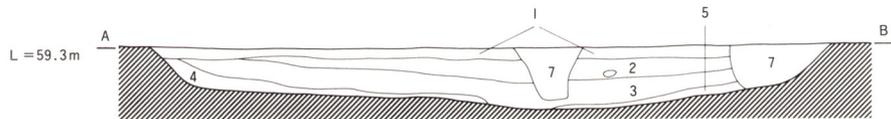
出土遺物は少なく西側の周溝より、2・3・6層中に外側から転落する状態で須恵器大甕の口縁部・胴部一部を検出したにすぎない。この大甕は3号墳より出土したものと接合した。(佐藤)



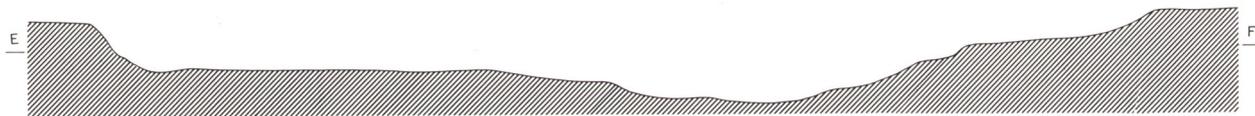
第4図 堂場1号墳出土遺物

堂場1号墳出土遺物 (第4図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
大甕	1	口径 16.9	胎・石英 雲母 白色粒子 微砂多 小石 成・胴部と口縁部接合 整・外面 胴部平行タタキ 内面 胴部青海波タタキ 頸部内外面横位ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・灰白色 出・2・3・6層 3号墳11層接・3号墳と接合 残・口縁部3/4



- 1号墳土層
- 1. 表 土
 - 2. 暗褐色土 ローム粒子含む。
 - 3. 黒色土 上層にAスコリア、下層にロームブロック含む。
 - 4. 黄褐色土 ロームブロック及び小礫含み黒色土混じり。
 - 5. 黄褐色土 小礫含み黒色土混じり。
 - 6. 黄褐色土 小礫を少量含む
 - 7. 攪 乱 Aスコリアを極多量に含み黒色土織状に堆積する。



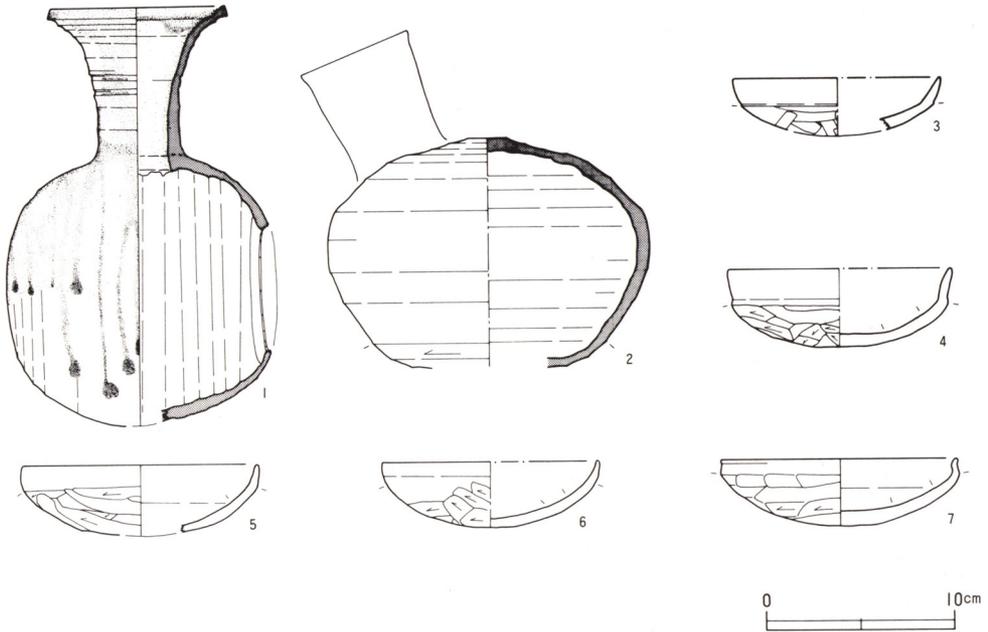
第5図 堂場1号墳土層図・エレベーション図

2号墳 (第6・7・10図、附図3、写真図版2・15)

2号墳は調査区の東側中央に位置し、北東部で1号墳に近接する。周溝の外形プランはほぼ円形を描くが内形は不整形である。特に西側は直線のラインを見せ方墳を思わせるが、円墳と考えられる。周溝は南側で途切れブリッジとなる。周溝幅は最大4.5m、最小1.8m、墳丘部は最大12.5mを測る。コンタラインを検討すると、幾つかの単位で摺鉢状に落ち込む部分が確認され、最も深いのは北側で確認面より1.1m、ブリッジ両側は比較的浅くなる。これらの落ち込みは、墳丘部の土砂採取が目的であると推定できる。

表土剥ぎの段階で墳丘部に石材が見られたが攪乱が著しく、主体部の痕跡は確認できなかった。但し、墳丘部や周溝中より加工痕のある角閃石安山岩が出土したため、角閃石安山岩を利用した主体部であったと推定される。尚、旧表土面は直接浅間A軽石に覆われており、天明以前に墳丘は削平を受けたものと考えられ、古墳の削平が早くに行われていたことを示唆している。

遺物は、ブリッジの両側周溝内に集中し、東側から須恵器フラスコ形長頸瓶、土師器坏、西側から土師器坏が検出された。東側の土師器坏が外側より落ち込んだ状態で出土した以外は、内側より落ち込む状態で出土した。大半の遺物は3・4層中より検出されているが、須恵器フラスコ形長頸瓶は2層中からの検出が目立つため、周溝の埋没が進んだ段階での落ち込みと考えられる。(井上)



第6図 堂場2号墳出土遺物

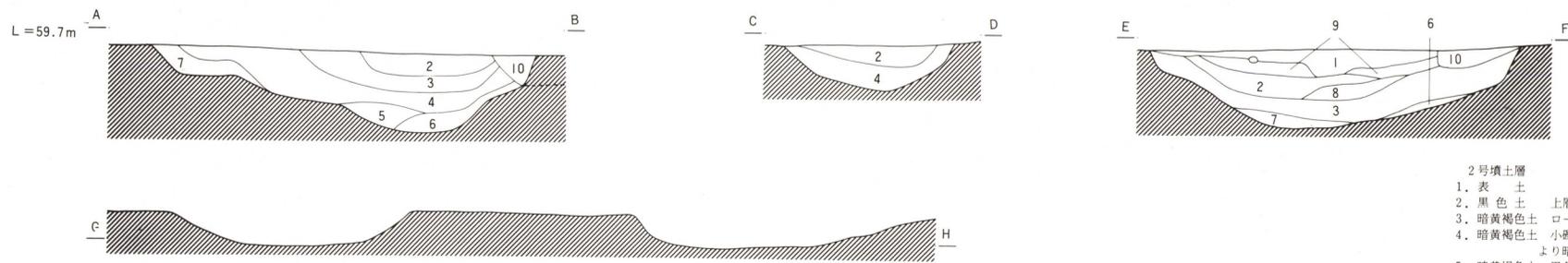
堂場 2 号墳出土遺物 (第 6 図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
フラスコ 形長頸瓶	1	口径 9.3 器高(22.0)	胎・石英 白色粒子 黒色粒子 緻密 成・ロクロ成形 胴部と口縁部 接合 整・内外面ロクロナデ(時計回り) 焼・良 自然釉かかる 色・ 明灰白色(釉 濃緑色～茶褐色) 使・自然釉一部風化 出・2・3層 残・胴部2/3 口縁部 備・東海産
平瓶	2	底径(8.2)	胎・石英 雲母 砂粒多 小石(珪岩粒有) 成・天井部閉塞は絞り込 み 整・外面 底部ヘラケズリ 胴部内外面ロクロナデ 焼・普 色・ 暗灰白色 出・2・4層 残・胴部1/2
坏	3	口径(11.0)	胎・石英 雲母 白色粒子 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(黒斑有) 色・橙褐色(黒 斑部 黒褐色) 残・1/8
坏	4	口径(11.9) 器高 4.1	胎・石英 雲母 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 体 部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良(体部外面に黒斑有) 色・ 橙褐色(体部外面 黒褐色) 出・3層 残・1/2
坏	5	口径 12.2 器高(3.7)	胎・石英 雲母 白色粒子 角閃石 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 体 部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(体部外面に黒斑有) 色・橙褐色(黒斑部 黒褐色) 残・3/4
坏	6	口径(11.5) 器高(3.5)	胎・石英 雲母 白色粒子 角閃石 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘ ラケズリ 内面 底部ナデ 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・ 普(体部全面黒斑有) 色・橙褐色(黒斑部 黒褐色) 出・3層 残・1/ 4
坏	7	口径 12.6 器高 3.5	胎・石英 角閃石 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 体部 同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3層 残・ ほぼ完形

3号墳(第8・11図、附図4、写真図版3)

3号墳は調査区の北東隅に存在する。北東側の周溝は調査区外にかかり外端部を検出することはできなかった。周溝の内端部は直線を基調としており、N-31°-Eに軸をもつ一辺約15mの方墳になるものと思われる。墳丘はその痕跡もなく、主体部も確認することはできなかった。

周溝は北側コーナー及び南西側にブリッジをもつ。南西側ブリッジには4号墳の周溝が存在し、4号墳の周溝を回避するためとも考えられ、本来ブリッジとして機能していたかは疑問である。周溝内端部は各辺ともほぼ直線を保っているが、外端部は凹凸が著しい。特に、北西側では顕著である。周溝幅は北西部の最小部分で2.4m、最大部分で6mを測る。北東部周溝は外端部を検出していないが、



第7図 堂場2号墳土層図・エレベーション図

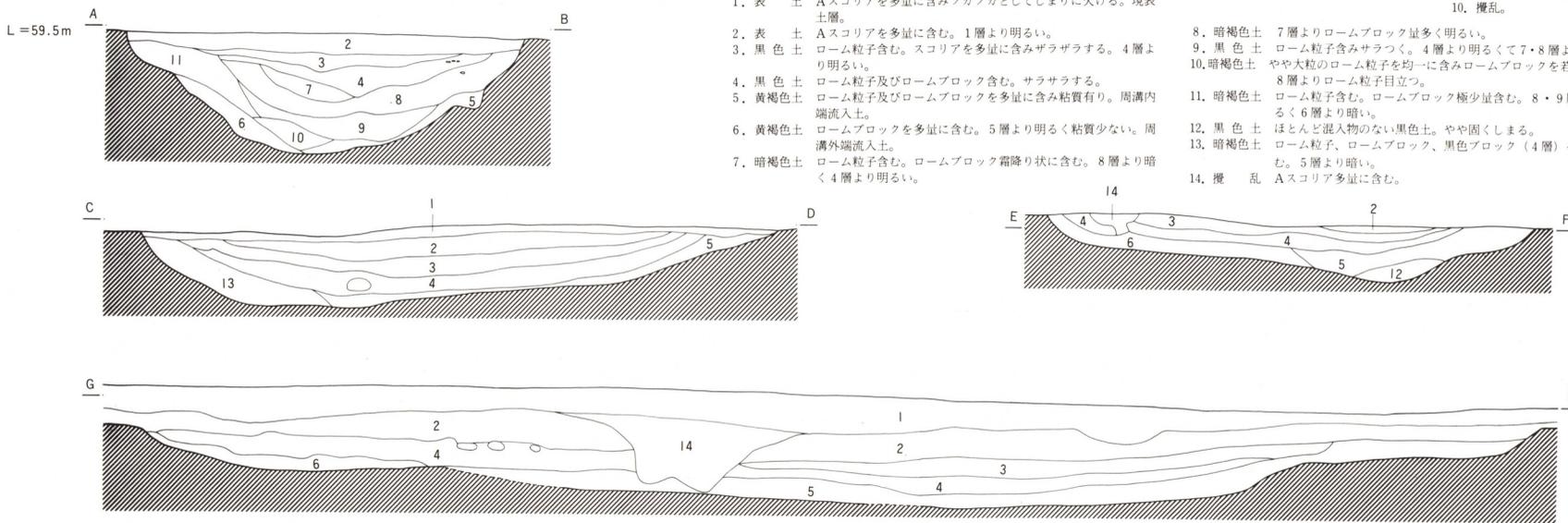
2号墳土層

1. 表土
2. 黒色土 上層にAスコリアを多量に含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒子含む。
4. 暗黄褐色土 小礫含む。3層より明るく6層より暗い。
5. 暗黄褐色土 黒色土混じり。墳丘崩壊土か？
6. 黄褐色土 ロームブロック含む。
7. 暗黄褐色土 ローム粒子含む。4層より暗い。
8. 暗黄褐色土 ローム粒子含む。2層より明るく3層より暗い。
9. 黒色土 Aスコリア含む。2層よりやや明るい。
10. 攪乱。

3号墳土層

1. 表土 Aスコリアを多量に含む。現表土層。
2. 表土 Aスコリアを多量に含む。1層より明るい。
3. 黒色土 ローム粒子含む。スコリアを多量に含む。4層より明るい。
4. 黒色土 ローム粒子及びロームブロックを含む。サラサラする。
5. 黄褐色土 ローム粒子及びロームブロックを多量に含む。粘質有り。周溝内端流入土。
6. 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。5層より明るく粘質少ない。周溝外端流入土。
7. 暗褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック露降状に含む。8層より暗く4層より明るい。

8. 暗褐色土 7層よりロームブロック量多く明るい。
9. 黒色土 ローム粒子含むサラつく。4層より明るく7・8層より暗い。
10. 暗褐色土 やや大粒のローム粒子を均一に含む。ロームブロックを若干含む。8層よりローム粒子目立つ。
11. 暗褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック極少量含む。8・9層より明るく6層より暗い。
12. 黒色土 ほとんど混入物のない黒色土。やや固くしまる。
13. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒色ブロック(4層)を多量含む。5層より暗い。
14. 攪乱 Aスコリア多量に含む。

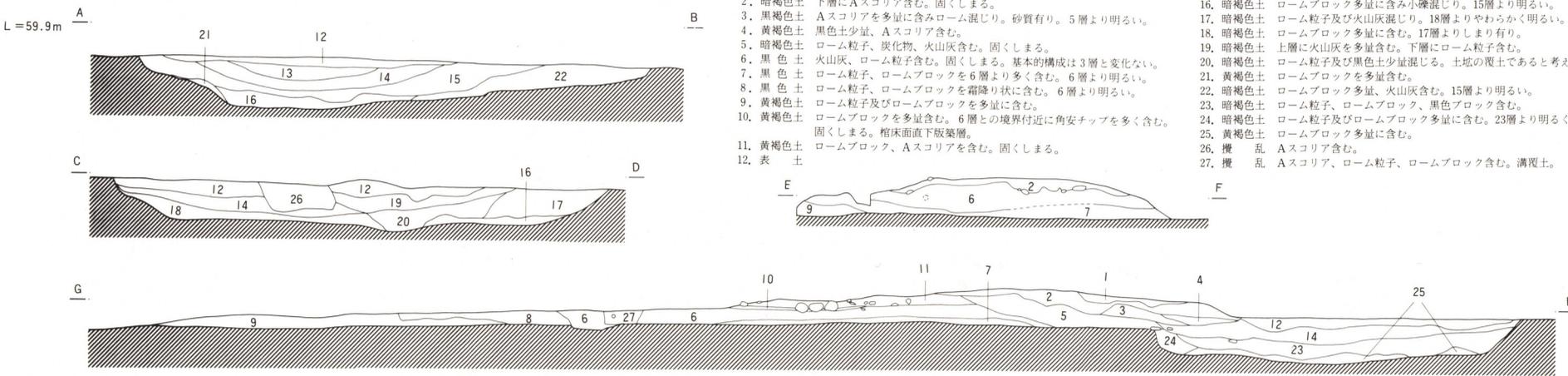


第8図 堂場3号墳土層図

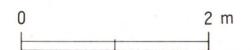
4号墳土層

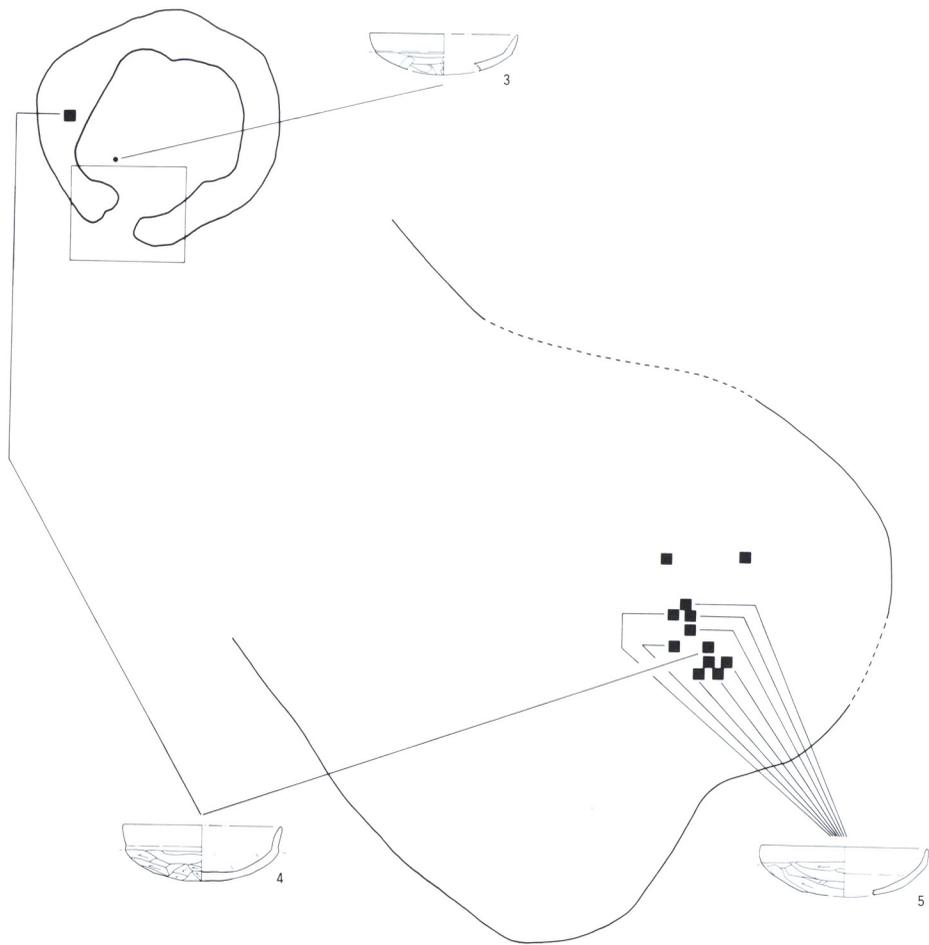
1. 黄褐色土 小礫含む。固くしまる。
2. 暗褐色土 下層にAスコリア含む。固くしまる。
3. 黒褐色土 Aスコリアを多量に含む。ローム混じり。砂質有り。5層より明るい。
4. 黄褐色土 黒色土少量、Aスコリア含む。
5. 暗褐色土 ローム粒子、炭化物、火山灰含む。固くしまる。
6. 黒色土 火山灰、ローム粒子含む。固くしまる。基本的構成は3層と変わらない。
7. 黒色土 ローム粒子、ロームブロックを6層より多く含む。6層より明るい。
8. 黒色土 ローム粒子、ロームブロックを露降状に含む。6層より明るい。
9. 黄褐色土 ローム粒子及びロームブロックを多量に含む。
10. 黄褐色土 ロームブロックを多量含む。6層との境界付近に角安チップを多く含む。固くしまる。相床面直下版築層。
11. 黄褐色土 ロームブロック、Aスコリアを含む。固くしまる。
12. 表土

13. 黒褐色土 ローム粒子少量、火山灰を多量に含む。14層より明るい。
14. 黒色土 ローム粒子含む。
15. 暗褐色土 ローム粒子、黒色土混じり、上層に火山灰を少量含む。
16. 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。小礫混じり。15層より明るい。
17. 暗褐色土 ローム粒子及び火山灰混じり。18層より明らかに明るい。
18. 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。17層より明らかに明るい。
19. 暗褐色土 上層に火山灰を多量含む。下層にローム粒子含む。
20. 暗褐色土 ローム粒子及び黒色土少量混じり。土壇の覆土であると考えられる。
21. 黄褐色土 ロームブロックを多量含む。
22. 暗褐色土 ロームブロック多量、火山灰含む。15層より明るい。
23. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒色ブロック含む。
24. 暗褐色土 ローム粒子及びロームブロック多量に含む。23層より明るく26層より暗い。
25. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
26. 攪乱 Aスコリア含む。
27. 攪乱 Aスコリア、ローム粒子、ロームブロック含む。溝覆土。

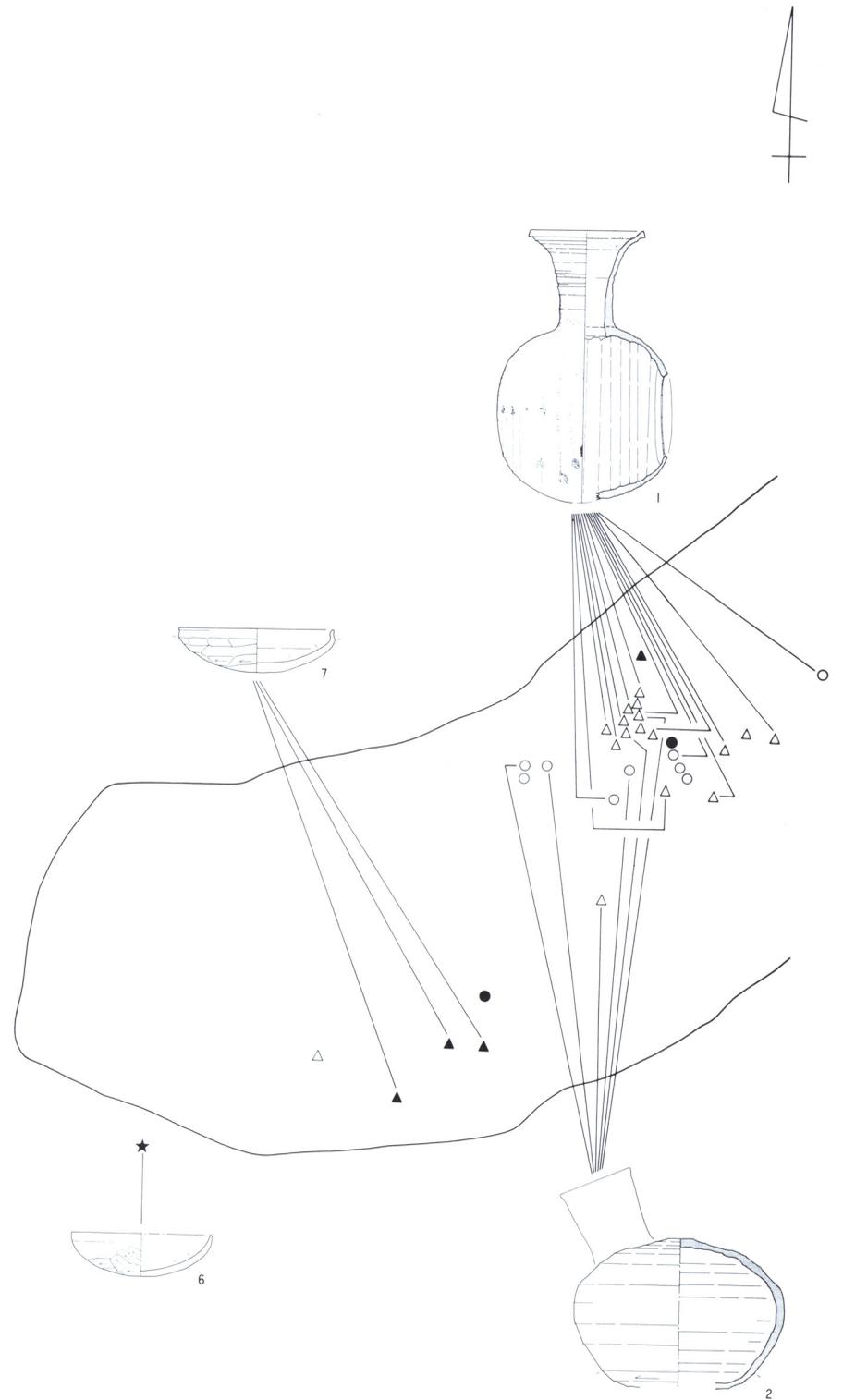


第9図 堂場4号墳土層図





- 2層 土師
- 2層 須恵
- 3層 土師
- ▲ 4層 土師
- △ 4層 須恵
- ★ 確認面 土師
- 覆土



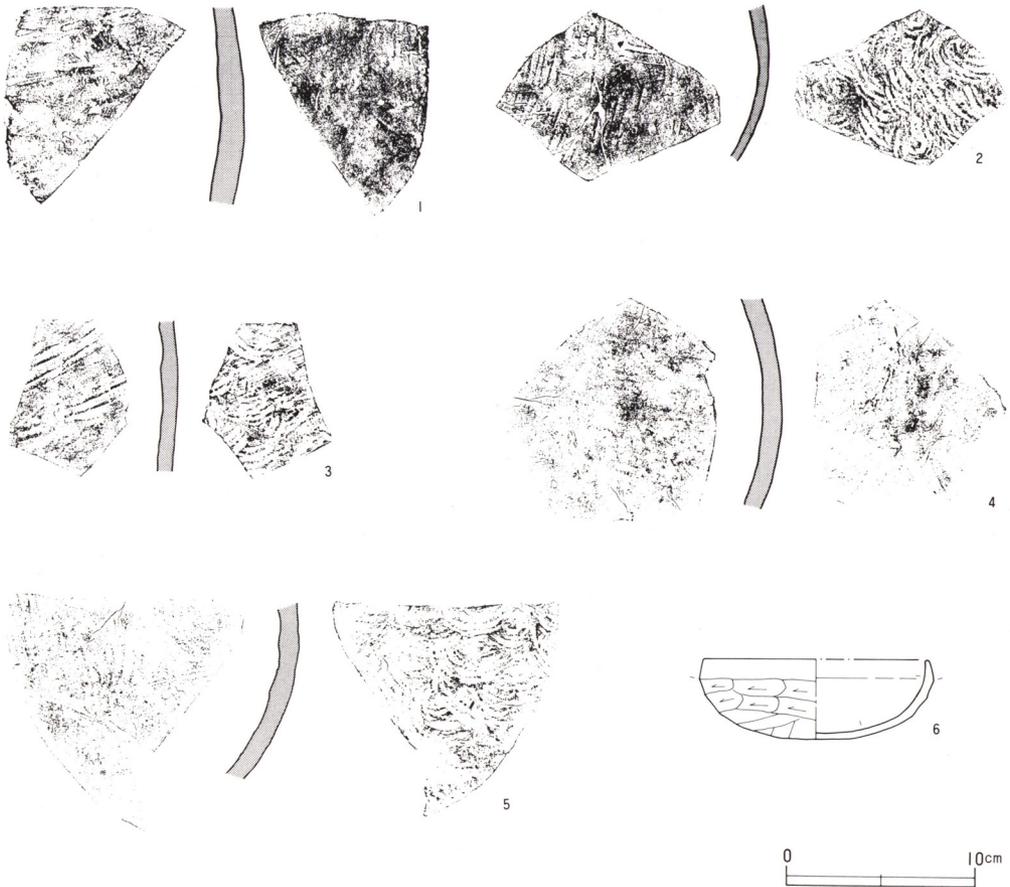
第10図 堂場2号墳遺物接合関係図

「旭・小島古墳群緊急調査」による実測図によれば、本墳の周溝部にあたる位置に直線的にコンタラインが巡っており、周溝を反映しているものと考えられる。

南西側周溝は径7.8mのほぼ円形プランで摺鉢状の形態を呈し、確認面からの深さ0.8mである。内端部はかならずしも弧を描かないが、コーナー部であることや、墳丘の存在を考慮したものと考えられる。まとめの項でも触れるが、この周溝の直径を20等分した35cmを一尺とする尺度によって各部の数値を割り切ることができる。南東側周溝はその南側付近で急激に深くなり、確認面からの深さは1.4mを測る。この部分からは、内側から転落する状態で8層中より土師器坏が、外側から転落する状態で11層中より須恵器大甕の口縁部が出土している。尚、この大甕は1号墳のものと接合した。

周溝内からは、北西側の周溝を除いて、主に3・4層中より石材が認められた。その分布は、北東部～南東部にかけて密である。角閃石安山岩片も混じるため、主体部の石材も転落していると推定されるが、葺石の施設の存在を推定することに無理はないものと考えられる。

尚、南西側周溝の3層中よりウマの臼歯が出土しているが、周辺に近代のウマの埋葬址が確認されており、それらと同様なものと考えられる。 (佐藤)



第11図 堂場3号墳出土遺物

堂場3号墳出土遺物（第11図）

器種	番号	法量(cm)	特 徴
大甕	1		胎・石英 白色粒子 微砂多 整・外面 平行タタキ 内面 横位ユビナデ 焼・普 色・暗灰白色 出・4層 残・胴部一部
大甕	2		胎・石英 雲母 微砂多 白色粒子多 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 焼・普 色・暗青灰色 出・4層 残・胴部一部
大甕	3		胎・雲母 白色粒子多 微砂多 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ後横位ユビナデ 焼・普 色・暗灰白色 残・胴部一部
大甕	4		胎・石英 白色粒子 微砂多 緻密 整・外面 平行タタキ 内面 横位ユビナデ 焼・普（サンドイッチ状） 色・淡黄褐色 出・3層 残・胴部一部
大甕	5		胎・雲母 白色粒子 微砂多 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 焼・普 色・暗青灰色 出・4層 残・胴部一部
坏	6		胎・石英 雲母 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 出・8層 残・1/2

4号墳（第9・12・13・14図、附図5、写真図版4・5・6・15）

4号墳は調査区の中央寄りに存在し、北側で3号墳、南東側で2号墳と接する。周溝は完掘することができ、部分的に不整形な箇所もあるが、周溝内径18m、同外径27mを測る円墳であると考えられる。今回の調査古墳中最大規模である。墳丘は完全に削平されており調査前にその兆候をうかがうことはできなかったが、主軸をN-0°-Eにもつ横穴式石室の根石及び棺床面の一部を検出することができた。石室の掘り方の形状は攪乱等により明らかにし得なかったが、棺床面下を断割った結果、旧表土と考えられる黒色土（3層）を一旦掘り込み、ロームブロックを霜降り状に含んだ黒色土（2層）を突き固めている状況が確認できた。羨道部はこの上に直接礫を敷き床面とするが、玄室部はさらに黄褐色土（1層）の薄い版築土を挟み棺床面を構築している。尚、1層と2層の間には角閃石安山岩のチップが多く含まれていた。掘り方を埋めていた黒色土（2層）は現存する南側の根石より5.3m程北側で途切れるようであり、この部分までが掘り方であったと考えられる。このあたりはほぼ墳丘の中心部にあたり、横穴式石室においては玄室の奥壁を墳丘の中心に設定することはよくみられることであり、その妥当性を裏付けている。したがって、石室の全長は5～6m程であったと推定できる。側壁は玄室左側の根石部を残すのみであり、遺存していたのは3個にすぎなかったが、欠落部には抜き取り痕が遺存していたところもあった。石室の平面プランは不明であるがあまり胴は張らないようである。根石は全て角閃石安山岩の転石で、石材同士が接する側面に若干の加工面が存在する以外は自然面である。壁側は直線となるように揃えて据え置かれているが、裏込め側は不整である。根石の上部のレベルは棺床面と同レベルであり、壁体として直接露出してはいなかったようである。根石の裏側

には根石とほぼ同大の礫を積み、裏込めとしている。床面は10～15cm前後の扁平な礫を敷きつめているが、大型の礫を並列させている箇所があり玄門部と推定される。玄室床面は密接に礫を敷きつめているが、羨道床面はやや粗雑な観がある。玄室床面と羨道床面とのレベル差は認められない。羨道部の壁体は遺存しなかったが、玄室の根石の遺存状況から考えて羨道床面の西側のラインがほぼ壁のラインと推定される。したがって、玄室幅に比し羨道幅が0.2m程狭かった程度であり羨道部と玄室部とあまり変化ない平面形態であったと推定される。

前庭部と推定される部分からは多量の礫が検出されている。部分的に目地の通る箇所もあり前庭部の構造が遺存している可能性もあったため精査したが、すべて2次的に移動したものであり石室材及び葺石材が転落したものと考えられる。尚、これらの礫群中からは50×20cm程の緑泥片岩の板材が外側に倒れる状態で2枚検出され、羨門部の部材が倒れたものと推定される。それらをその位置で起こして復原すると、羨道の長さは1.4m程になり、羨門部から周溝内端までの前庭部と推定される空間の長さは2.1m程になる。玄室からの遺物の出土は、棺床面下まで精査したにもかかわらず皆無であったが、羨道部からは床面上より鉄鏃の茎部と考えられる鉄製品が一点、ほぼ完形の土師器杯が1点出土した。また、前庭部からは須恵器平瓶及び甕が出土している。

前庭部前面の周溝からは、転落した礫に混じって多量の土師器杯の破片が出土している。これらは14・15層中より出土したものがほとんどで、墳丘部のものと接合したのものもある。出土状況も一定のまとまりをもつとはいえ散乱状態であり、周溝内に据え置かれたものではなく、前庭部に存在したものが転落したと考えられよう。

周溝は北側で途切れブリッジ状を呈するがその幅は広く9mを測る。既に、3号墳の項で述べたとおり、この部分に3号墳の周溝が存在しており、極めて接近している状況である。尚、ブリッジ東側の周溝外側に炭化材が出土した土壌が存在するが、古墳とは直接関係ないものと思われる。

周溝の土層堆積状況は各部ともほぼ同様で、墳丘から流れ込んだ黄褐色土が堆積した後、黒色土の堆積がみられた。黒色土はスコリアを含む上層（13層）と含まない下層（14層）とに分層できたが、上層に含まれたスコリアは浅間B軽石と思われ、平安時代末までには周溝の埋没がかなり進んでいたことを物語っている。この層中からの遺物、礫の出土はほとんどみられなかった。周溝底面は比較的平坦で起伏が少なく確認面からの深さは0.5m前後を測るが、ブリッジ東側の塊状部分は若干深くなり0.7mを測る。まとめの項でも触れるがこの塊状部分は、3号墳の南西側塊状部分と同一の設計企画によってつくられており、ある点によって180°の点对称の関係にあり、3号墳と4号墳の密接な関係が窺われる。この部分からは22層中より外側から流れ込む状況で土師器杯が一点出土しているが、出土位置から推定して3号墳のものが混入した可能性もある。

周溝内からは前庭部前面を除けばほとんど礫は出土せず、葺石施設が存在しなかった可能性もあるが、前庭部及び前庭部前面の周溝内から検出された礫を全て石室が崩壊（破壊？）したものであると考えるには無理があり、前庭部のごく限られた部分のみに葺石が葺かれていた可能性も考えておきたい。

（佐藤）

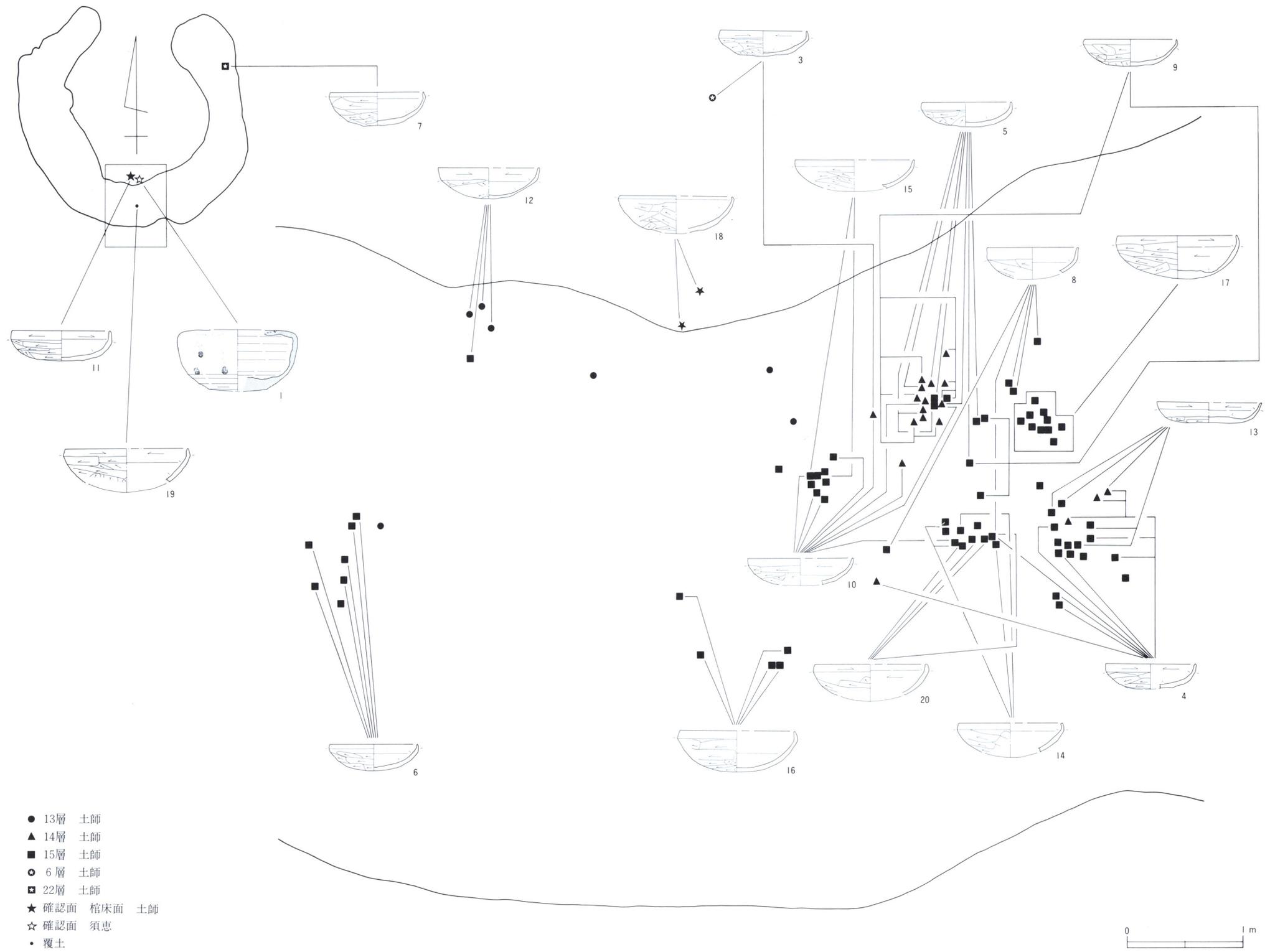


- 4号墳石室土層
1. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。2層との境界付近に角安チップ含む。しまり有り。
 2. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック霏降り状に含む。角安チップ少量含む。
 3. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック2層より多量に含む。1・2層程しまらない。旧表土。

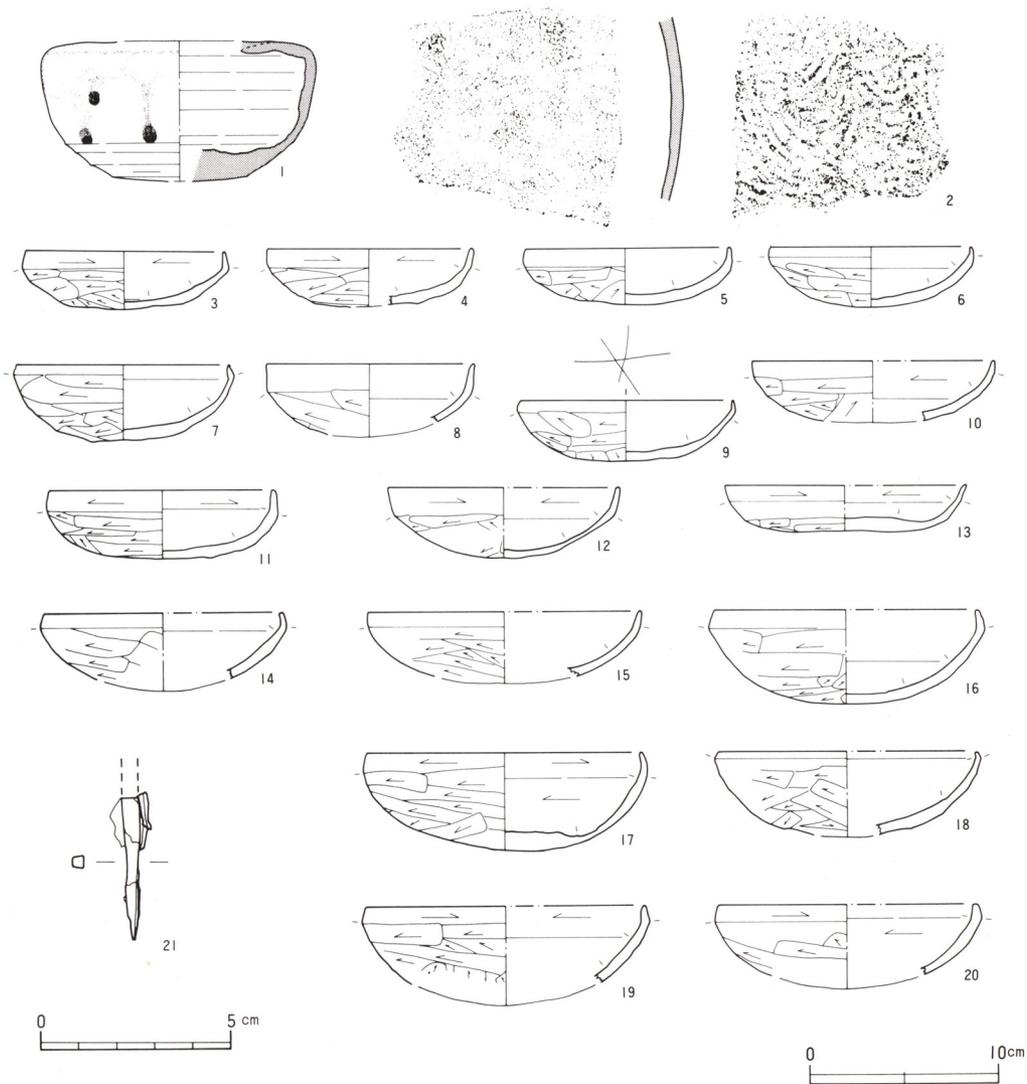
⊙ 土器
★ 鉄製品



第12図 堂場4号墳石室



第13図 堂場4号墳遺物接合関係図



第14図 堂場4号墳出土遺物

堂場4号墳出土遺物 (第14図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
平瓶	1		胎・雲母 白色粒子 黒色微石 微砂含み緻密 成・ロクロ成形 天井部の閉塞は円形粘土板による 整・内外面 ロクロナデ 外面 底部回転ヘラケズリ 焼・良 (自然釉かかる) 色・明灰白色 (釉 濃緑色～茶褐色) 出・確認面 残・胴部1/3 備・東海産
大甕	2		胎・雲母 角閃石 微砂多 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 焼・悪 色・黄褐色 出・13層 残・胴部一部

坏	3	口径 10.4 器高 3.1	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・暗 橙褐色 出・14・17層 残・体部 口縁部3/5
坏	4	口径 11.0 器高 (3.0)	胎・石英 白色粒子 角閃石 砂粒多 小石少 整・外面 体部ヘラケ ズリ 体部ナデ後ヨコナデ 焼・普 (口縁部内外面一部黒斑有) 色・ 橙褐色 出・14・15層 残・3/4
坏	5	口径 10.8 器高 3.0	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 焼・普 (黒斑有) 色・橙褐色 出・ 14・15層 残・ほぼ完形
坏	6	口径 10.5 器高 3.2	胎・雲母 石英 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・15 層 残・3/4
坏	7	口径 11.2 器高 4.0	胎・石英 白色粒子 角閃石 砂粒多 小石少 整・外面 体部ヘラケ ズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・22 層 残・4/5
坏	8	口径 11.0 器高 3.9	胎・石英 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同 心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・橙褐色 出・15層 残・体 部1/2 口縁部2/5
坏	9	口径 11.2 器高 3.2	胎・石英 白色粒子 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 (黒斑有) 色・ 橙褐色 出・14・15層 残・体部 口縁部3/4 備・内面底に線刻有
坏	10	口径(12.8)	胎・石英 雲母 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・14・15層 残・1/4
坏	11	口径 12.0 器高 3.6	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・橙褐色 出・棺床面 残・ほぼ完形
坏	12	口径 12.3 器高 (3.7)	胎・石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・13・15層 残・1/2
坏	13	口径(12.8) 器高 (2.4)	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙 褐色 出・14・15層 残・1/4
坏	14	口径(12.6)	胎・石英 角閃石 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心 円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・15層 残・1/4

坏	15	口径(14.5)	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・15層 残・1/6
坏	16	口径(14.0) 器高 (5.0)	胎・石英 雲母 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 形・外面底部に指頭痕有 焼・普 色・橙褐色 出・15層 残・1/4
坏	17	口径 14.5 器高 5.2	胎・石英 酸化鉄粒 砂粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ (ノッキング痕有) 内面 体部ユビナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・橙褐色 出・15層 残・体部 口縁部3/4
坏	18	口径(13.7)	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・確認面 残・1/5
坏	19	口径(14.8)	胎・石英 雲母 白色粒子 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・図示の1/4
坏	20	口径(13.8)	胎・雲母 角閃石 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・15層 残・1/4
鉄製 品	21		端部に向かうにつれ細くなる形状をとる 鉄鏝の茎部と考えられる 別の鉄製品が付着している

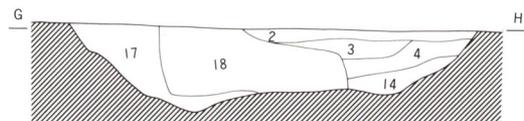
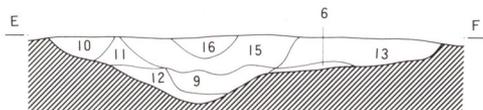
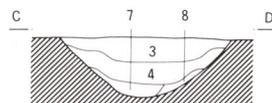
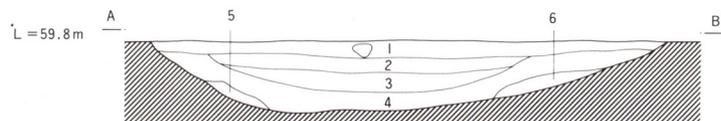
5号墳 (第15・16・17図、附図6、写真図版7・15)

5号墳は調査区の北西隅に位置し、東側で3号墳、4号墳に接近する。周溝の内形はほぼ正円を描き、外形は不整形であるが円墳と考えられる。南北2箇所ブリッジを持つが、北側ブリッジは主軸よりやや西側にずれて存在する。西側の周溝外端は著しく攪乱を受けており、外形は不明であるが、内端部が僅かに残存するため、墳形、規模の復原に支障はない。周溝幅は南北ブリッジ寄り幅広になり、最大幅6.8m、最小幅2.0m、墳丘部は最大径10.7mを測る。

コンタラインを検討すると、幾つかのまとまりを見出すことができ、最も深いのは南側で、確認面より1.1mを測ることができる。これらの落ち込みは、墳丘部の土砂採取が目的と推定されるが、周溝掘削の単位を示しているのかもしれない。ブリッジ寄り比較的浅くなる。尚、西側周溝内南側ブリッジ寄りの最も落ち込む部分に砂・礫を覆土とする攪乱部が断面方形に確認された。

主体部の詳細については削平を受け不明であるが、南側ブリッジが開口方向になると推定される。周溝内から礫が散見され、葺石の施設を想定することができる。

遺物の出土は、南側ブリッジの東側周溝内に集中しており、長頸瓶と思われる須恵器、土師器短頸壺、土師器坏が検出された。いずれも周溝内端ないし、ブリッジより転落する状態で、4層中より検出されている。(井上)

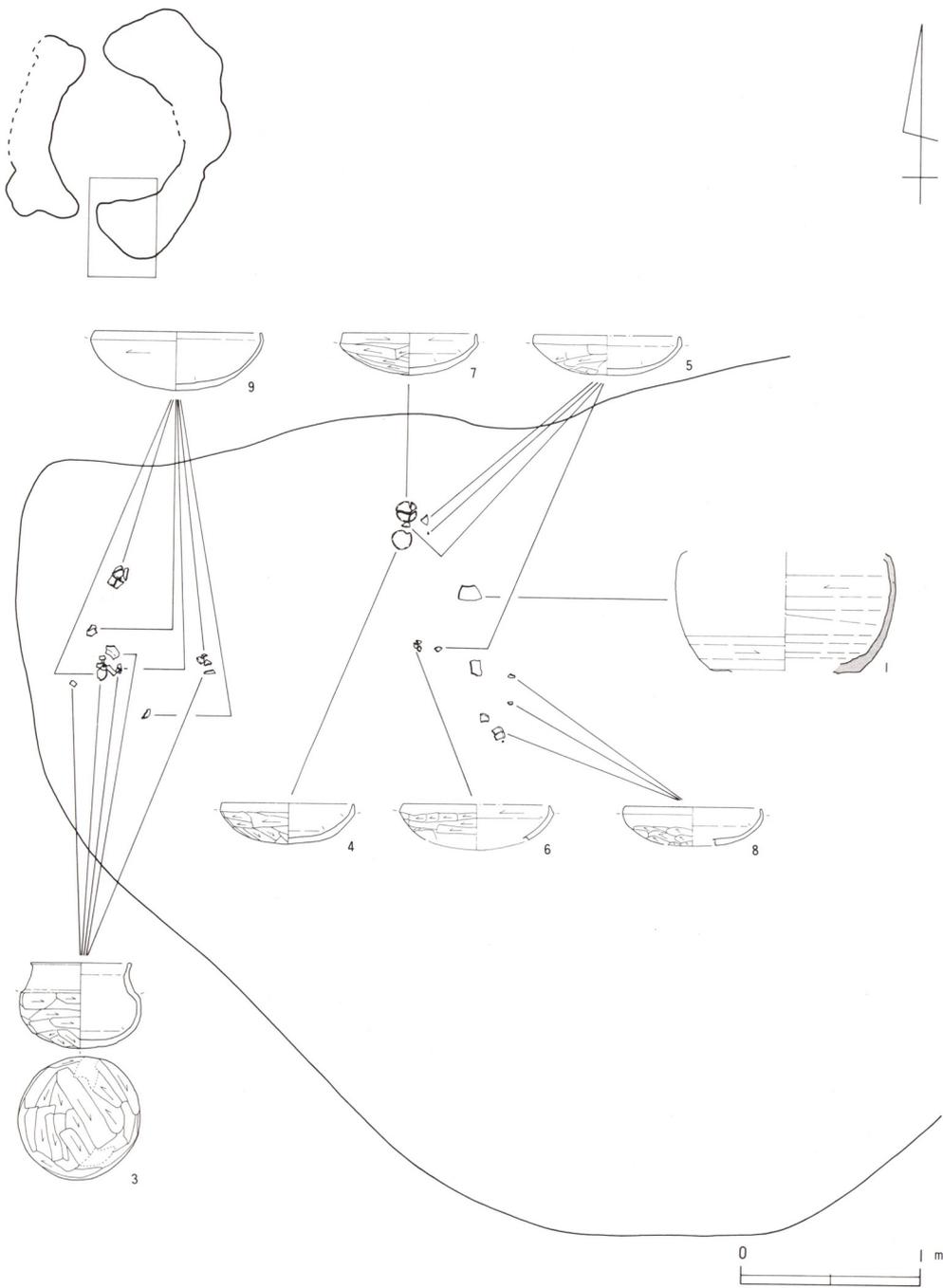


- 5号墳土層
1. 表 土
 2. 黒褐色土 火山灰多量に含む。
 3. 黒色土 上層に火山灰、下層にロームブロック含む。
 4. 暗褐色土 小礫含む。上層に火山灰少量含む。
 5. 黄褐色土 黒色土少量混じる。
 6. 黄褐色土 ロームブロック及び小礫含む。5層より明るい。
 7. 暗褐色土 ローム粒子含む。
 8. 暗黄褐色土 ロームブロック含む。
 9. 暗黄褐色土 上層にロームブロック多量。下層に黒色粒子少量含む。

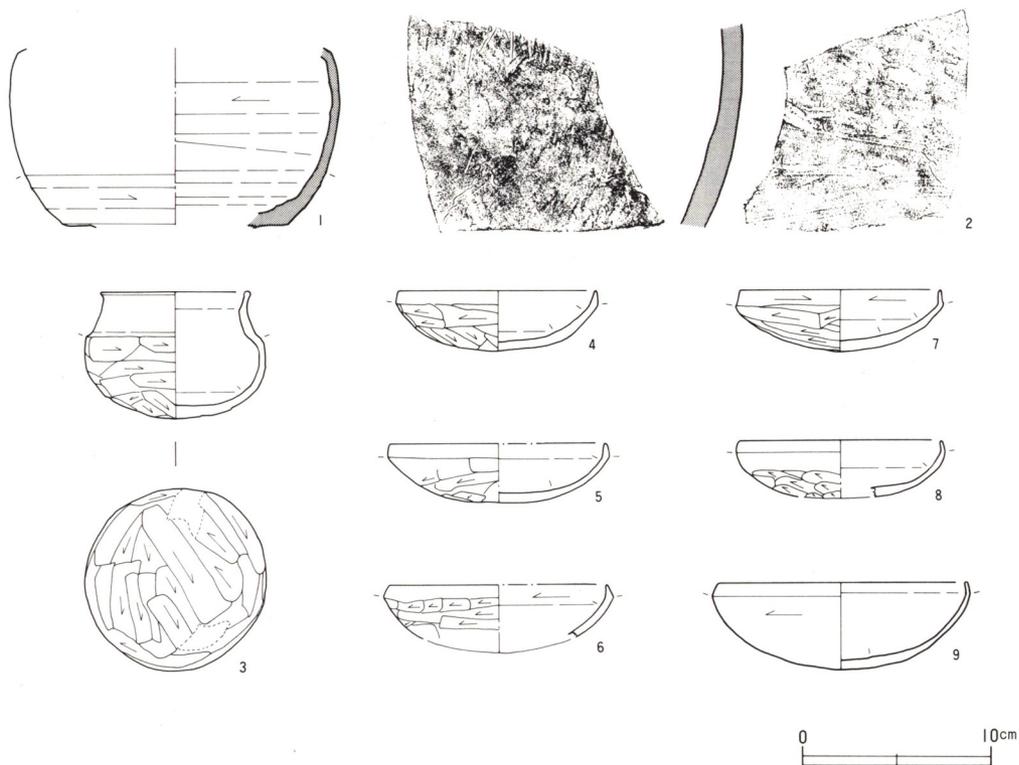
10. 暗褐色土 ローム粒子及び黒色粒子混じり。
11. 暗褐色土 黒色粒子少量混じる。10層より明るい。
12. 暗褐色土 ローム粒子含む。10層より明るく11層よりやや暗い。
13. 暗褐色土 小礫少量含む。上層に火山灰多量含む。4層よりやわらかい。
14. 暗褐色土 小礫及びロームブロック多量に含む。
15. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、礫、火山灰含む。
16. 攪 乱
17. 攪 乱 Aスコリア多量に含む。黒色土織状に堆積する。
18. 攪 乱 砂礫層。



第15図 堂場5号墳土層図・エレベーション図



第16図 堂場5号墳遺物接合関係図



第17図 堂場5号墳出土遺物

堂場5号墳出土遺物 (第17図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
長頸 瓶?	1	底径(12.0)	胎・石英 白色粒子多 微砂 砂粒多 小石(珪岩粒目立つ) 整・外面 底部回転ヘラケズリ 胴部ナデ 内面 胴部ロクロナデ 焼・普 色・ 暗灰色 出・4層 残・図示の1/4
大甕	2		胎・石英 白色粒子 微砂 緻密 整・外面 平行タタキ 内面 青海 波タタキ後ナデ(スリケシ) 焼・普(断面サンドイッチ状) 出・1 層 残・胴部一部
短頸 壺	3	口径 7.9 器高 6.7	胎・石英 白色粒子 小石 砂粒多 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・赤褐色 出・4層 残・ ほぼ完形
坏	4	口径 10.5 器高 3.2	胎・石英 白色粒子 角閃石 微砂 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(体部外 面黒斑有) 色・赤褐色 出・4層 残・ほぼ完形

坏	5	口径(11.5) 器高(3.1)	胎・石英 角閃石 白色粒子 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 底部 ナデ 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・ 4層 残・1/4
坏	6	口径(11.5) 器高(3.6)	胎・石英 雲母 白色粒子 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・橙褐色 出・4層 残・1/4
坏	7	口径 10.7 器高 3.3	胎・石英 角閃石 微砂 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ(一部ノッ キング痕有) 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(口縁部外面 黒斑有) 色・赤褐色 出・4層 残・完形
坏	8	口径(10.7) 器高(3.1)	胎・石英 白色粒子 角閃石 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 体部ヘラ ケズリ(未調整有) 内面 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・ 良 色・橙褐色 出・4層 残・1/4
坏	9	口径 13.2 器高 4.7	胎・雲母 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 風化不明瞭(ナ デ後同心円状ナデか?) 焼・悪 色・橙褐色 出・4層 残・3/4

6号墳 (第18・19・20・21図、附图7、写真図版8・9・15・16)

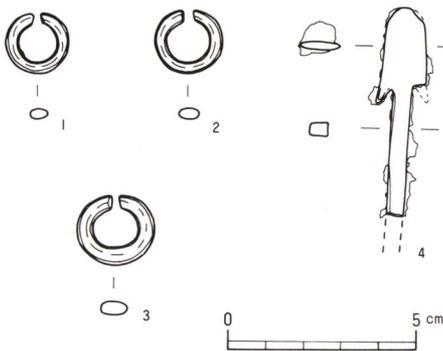
6号墳は調査区の西側に存在し、全体の%を調査することができた。南側で7号墳と接する。

周溝は他の古墳同様不整形で凹凸が目立つが、径14m程の円墳であると考えられる。南側は周溝が途切れブリッジ状を呈するが、調査区に沿って近年の攪乱が著しくあまり状況はよくない。周溝幅は一定しないが東側の最大部で7m、南側の最小部で4mを測る。周溝底面は摺鉢状に深くなる部分が存在し、南側の最も深い部分は確認面からの深さが1.4mである。尚、東側の周溝内に楕円形に深くなる部分が存在するが、周溝の覆土を掘り込んで掘削されており、古墳に直接伴うものではない。

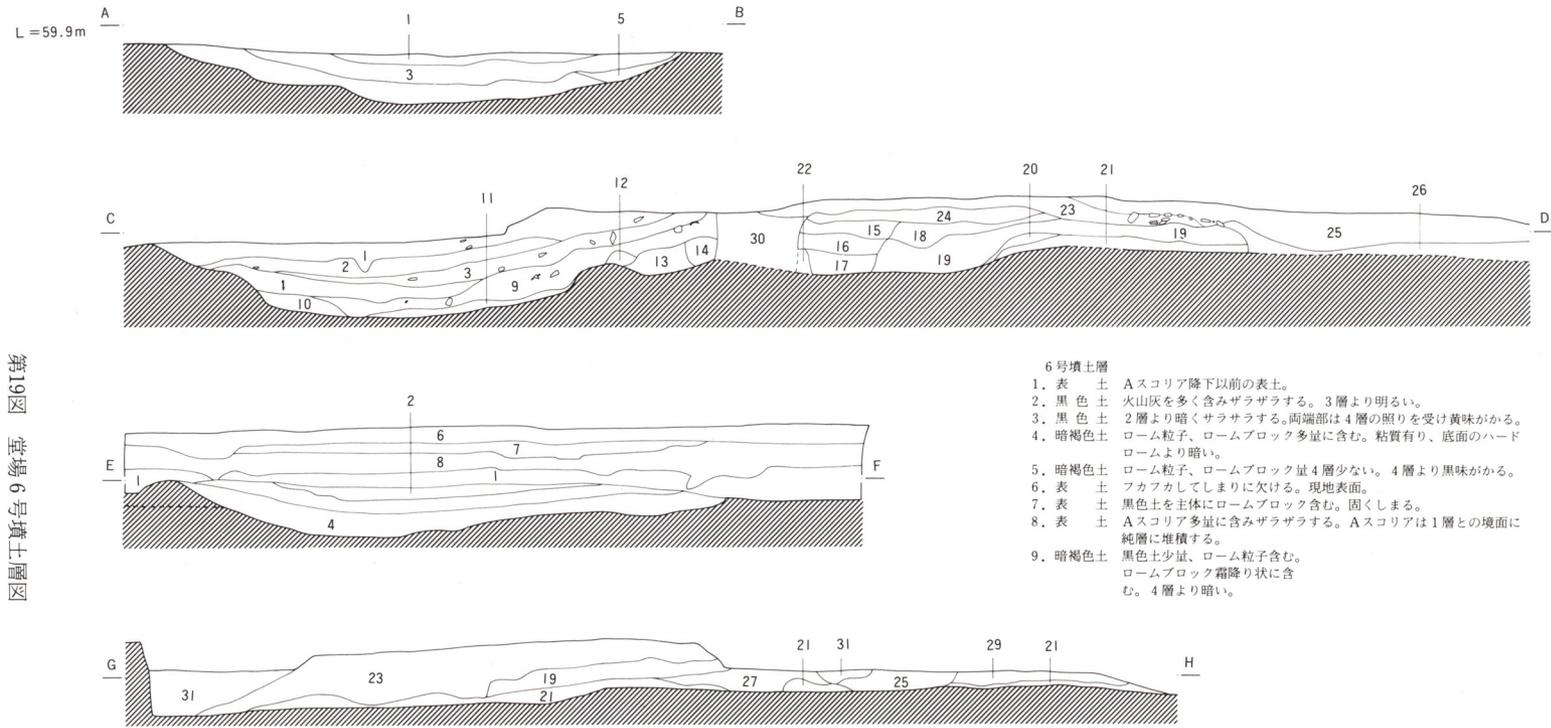
墳丘部からは多量の礫が出土しており、石室の遺存が予測されたが、攪乱により全て2次的に移動していた。礫に混って鉄鏃や耳環、土師器が出土している。

周溝内からの遺物の出土は石室開口部と推定される南側に集中しており、大量の礫に混って須恵器や土師器短頸壺、30個体以上の坏が出土している。これらは主に3・4・9層から出土しており、前庭部より転落したものが大半であると考えられる。尚、これらに混って9層中より耳環が出土しており注目される。これは追葬時に棺床面を掻きだす行為があったか、早くに石室が崩壊し混入したものと考えられる。

(佐藤)



第18図 堂場6号墳出土遺物(1)



10. 暗褐色土 黒色ブロック量9層より多く暗い。
 11. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。4・9層より明るい。
 12. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック霜降り状に含む。ややしまり有り。
 13. 黄褐色土 ロームブロック多量、白色バミス粒含む。
 14. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック霜降り状に含む。ややしまり有り。
 15. 黒色土 14層より小粒のローム粒子、ロームブロック霜降り状に含む。白色バミス粒含む。しまり有り。
 16. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量に含む。白色バミス粒含む。しまり有り。
 17. 暗褐色土 基本的に16層と大差なくやや暗い、しまり有り。
 18. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、白色バミス粒含む。16・17層より暗い。しまり有り。

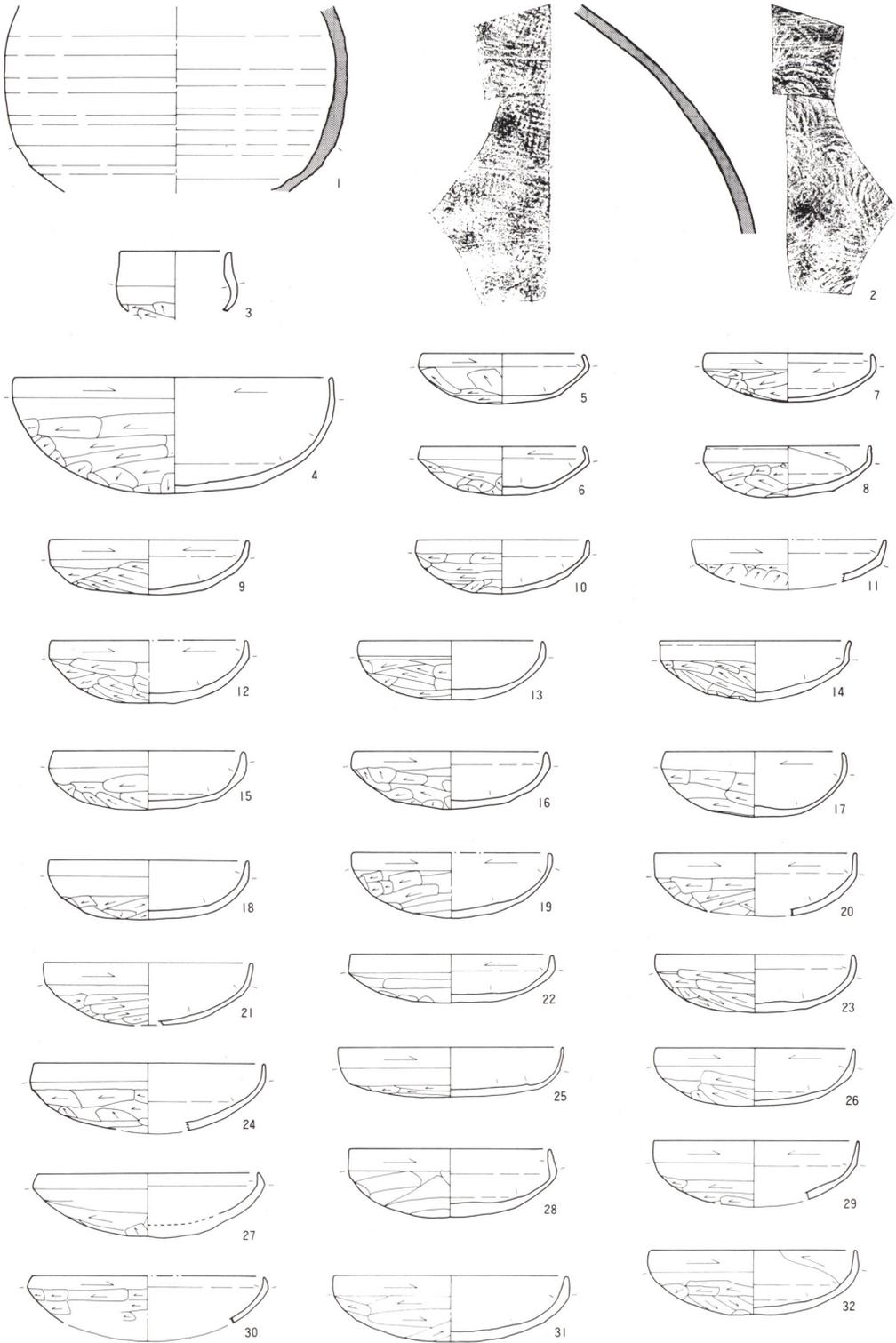
19. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック霜降り状に含む。白色スコリア粒含む。ややしまり有り。旧表土層か？
 20. 暗褐色土 19・21層の漸移層。
 21. ソフトローム。
 22. 黄褐色土 大型のロームブロック多量に含む。
 23. 攪乱 ローム粒子、ロームブロック含む。固くしまる。
 24. 攪乱 ローム粒子、ロームブロック含む。固くしまる。
 25. 攪乱 大型のロームブロック多量、砂利含む。固くしまる。
 26. 攪乱 ローム粒子、ロームブロック、黒色ブロック含む。固くしまる。
 27. 黒色土 白色スコリア粒含む。19層より明るい。旧表土か？
 28. 黒色土 29層より暗い。
 29. 黒色土 白色スコリア粒含む。27層より明るい。
 30. 攪乱 礫多量に含む。
 31. 攪乱

6号墳土層
 1. 表土 Aスコリア降下以前の表土。
 2. 黒色土 火山灰を多く含むザラザラする。3層より明るい。
 3. 黒色土 2層より暗くサラサラする。両端部は4層の照りを受け黄味がかかる。
 4. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量に含む。粘質有り、底面のハードロームより暗い。
 5. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック量4層少ない。4層より黒味がかかる。フカフカしてしまりに欠ける。現地表面。
 6. 表土 黒色土を主体にロームブロック含む。固くしまる。
 7. 表土 Aスコリア多量に含むザラザラする。Aスコリアは1層との境面に純層に堆積する。
 8. 表土 黒色土少量、ローム粒子含む。ロームブロック霜降り状に含む。4層より暗い。





第20図 堂場6号墳遺物接合関係図



第21図 堂場6号墳出土遺物(2)

0 10cm

堂場 6 号墳出土遺物 (第18図)

種別	番号	特 徴
耳環	1	長径1.7cm 短径1.6cm 断面長径0.5cm 断面短径0.3cm 瑁部開隔0.2cm 錆化著しく金張り全体的に剝離著しい 内側に金張り残存認められる 瑁部の間隔は斜めに切られている 確認面より出土
耳環	2	長径1.8cm 短径1.7cm 断面長径0.6cm 断面短径0.3cm 瑁部間隔0.3cm 錆化著しく金張りわずかに認められる 瑁部の間隔は斜めに切られている 確認面より出土
耳環	3	長径2.0cm 短径1.8cm 断面長径0.7cm 断面短径0.4cm 瑁部間隔0.2cm 比較的錆化及び金張りの剝離少ない 瑁部の間隔は斜めに切られている 9層より出土
鉄鍔	4	頸部は篋被を欠失するが棘状を呈するものと思われる 鍔身部は両丸造三角形式で逆利をもつ 鍔身と頸部とに折損している 全体に錆化著しい 9層より出土

堂場 6 号墳出土遺物 (第21図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
壺	1		胎・石英 酸化鉄粒 微砂 成・ロクロ成形 整・外面 胴部ロクロナデ後底部ヘラナデ 内面 ロクロナデ 焼・普 色・明灰白色 出・9層 残・1/5
大甕	2		胎・白色粒子 微砂 緻密 整・外面 格子目タタキ 内面 青海波タタキ後横位ナデ 焼・良(堅緻) 色・外面 淡緑色(釉) 内面 青灰白色 出・9層 接・5号墳と接合 残・胴部一部 備・東海産
短頸壺	3	口径 6.5	胎・雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・3層 残・口縁部1/4
鉢	4	口径 18.7 器高 6.9	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3・4・9層 残・3/4
坏	5	口径 9.7 器高 3.0	胎・雲母 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 焼・良(黒斑有) 色・赤褐色 出・4層 残・体部 口縁部3/4
坏	6	口径 9.8 器高 2.9	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂多 成・成形時指頭圧痕残る 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良(黒斑有) 色・赤褐色(黒斑部 黒褐色) 出・4層 残・体部 口縁部3/4

坏	7	口径 10.0 器高 2.9	胎・石英 雲母 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 (黒斑有) 色・淡赤褐色 出・4層 残・体部 口縁部3/4
坏	8	口径 9.8 器高 3.0	胎・石英 雲母 白色粒子 微砂 緻密 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・赤褐色 出・3・4層 残・ほぼ完形
坏	9	口径 11.8 器高 3.3	胎・石英 雲母 角閃石 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・9層 残・完形
坏	10	口径 10.2 器高 3.2	胎・石英 雲母 角閃石 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・赤褐色 出・3・4層 残・体部 口縁部3/4
坏	11	口径(11.6)	胎・石英 雲母 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・赤褐色 出・9層 残・1/4
坏	12	口径(11.7) 器高 3.7	胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(黒斑有) 色・淡橙褐色 出・2・9層 残・1/2
坏	13	口径 11.0 器高 3.5	胎・石英 白色粒子 角閃石 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・3・9層 残・ほぼ完形
坏	14	口径 11.4 器高 3.6	胎・石英 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3層 残・ほぼ完形
坏	15	口径 11.3 器高 3.5	胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3・4・9層 残・ほぼ完形
坏	16	口径 11.5 器高 3.4	胎・石英 雲母 白色粒子 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・赤褐色 出・4層 残・2/3
坏	17	口径 10.6 器高 3.9	胎・石英 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・赤褐色 使・風化著しい 出・3・4層 残・ほぼ完形
坏	18	口径 11.8 器高 3.5	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3・4層 残・ほぼ完形

坏	19	口径(11.7) 器高 3.9	胎・石英 角閃石 酸化鉄粒 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡 橙褐色 出・4・9層 残・3/5
坏	20	口径 12.1 器高 (3.7)	胎・石英 雲母 白色粒子 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3・ 9層 残1/2
坏	21	口径 12.3 器高 3.7	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂 砂粒 整・外面 体部ヘラ ケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・暗褐色 出・4層 残・1/2
坏	22	口径 12.1 器高 2.9	胎・石英 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・赤褐色 出・3・4・9層 残・3/4
坏	23	口径 11.7 器高 3.5	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂多 小石 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐 色 出・9層 残・体部 口縁部3/4
坏	24	口径 13.7 器高 4.2	胎・雲母 白色粒子 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪(黒斑有) 色・赤褐色 出・4層 残・3/4
坏	25	口径 13.3 器高 3.0	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・ 4層 残3/4
坏	26	口径 11.8 器高 3.5	胎・石英 雲母 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡 橙褐色 出・2・3・4・9層 残・体部 口縁部1/4
坏	27	口径 13.0 器高 3.7	胎・石英 雲母 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・2・9層 残・1/2
坏	28	口径 12.0 器高 4.1	胎・雲母 角閃石 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 後同心円状ナデ 焼・悪 色・赤褐色 出・4・9層 残・口縁部3/4
坏	29	口径 12.2 器高 (4.0)	胎・石英 雲母 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心 円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・2・3・9層 残・ 3/4
坏	30	口径(13.6)	胎・雲母 微砂多 小石 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部同心 円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・9層 残・1/4
坏	31	口径(14.0) 器高 4.0	胎・石英 雲母 角閃石 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・3・ 4・9層 残1/2

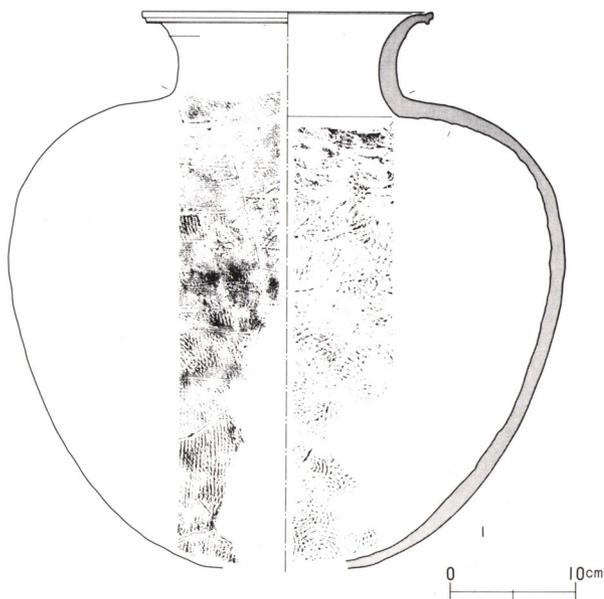
坏	32	口径 12.1 器高 3.8	胎・石英 雲母 砂粒多 白色粒子 角閃石 整・外面 体部ヘラケズ り 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 色・橙褐色 出・2・3・4・9層 残・完形 備・内面底面に布状の圧痕有り
---	----	-------------------	--

7号墳 (第22・23・24・25図、附図8、写真図版10・11・16)

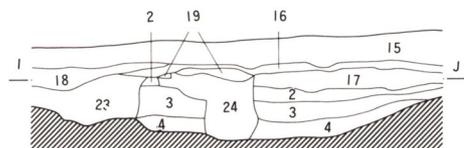
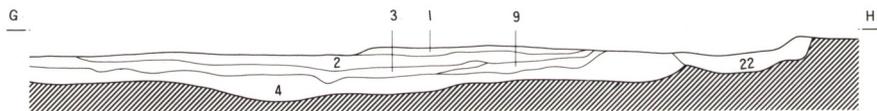
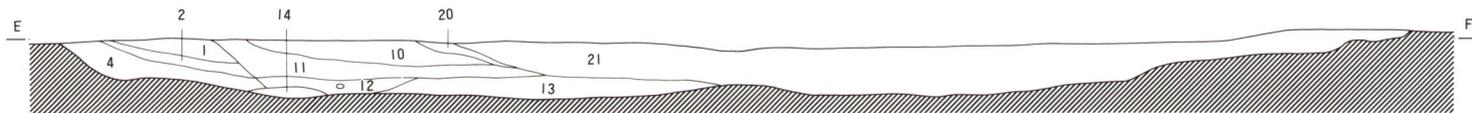
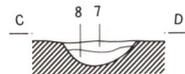
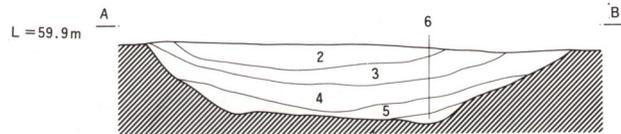
7号墳は調査区の南西隅に位置し、北側で6号墳、東側で8号墳と接する。周溝は完掘することができた。周溝外端部の形態は凹凸が著しく一定しないが、内端部はほぼ正円を描き、周溝内径15.9mの円墳であると考えられる。西側の周溝は調査区外へ延びていくが、周溝内と同様な土層堆積をしており、土層観察からも明瞭な重複関係は認められず、ここに別な古墳が1基存在した可能性がある。尚、東側の周溝も同様に延びていくが、これは攪乱である。周溝幅は西側の最大部で6.7m、南側の最小部で0.9mを測る。南側の周溝幅のせばまる部分は黒色土の堆積も見られず、設計溝の可能性があることを指摘しておきたい。周溝の深さは一定せず北側の最も深い部分で確認面より0.9m、南側の最も浅い部分で0.2mを測る。南側の周溝は不正円形に落ち込みがみられ、南側立ち上がりは近年の攪乱によって破壊されていたが、底面直上よりほぼ完形の土師器坏4点が正位に据え置かれる状態で検出され、墓前祭祀の場として使われていた可能性がある。

墳丘は調査前にもその兆候を窺うことはできず完全に削平されていた。表土除去作業中に墳丘部分から砂利が多く確認され石室が遺存していることも考えられたので注意したが、その痕跡も確認することはできなかった。尚、墳丘の北東より0.7×0.5mの範囲に焼土が検出されたが古墳に伴うものかはあきらかにし得なかった。

遺物は石室の開口部と考えられる南側に集中し、ある程度まとまりをもつとはいえ散乱状態でありそのほとんどが内側よりの転落と考えられる。器種は須恵器大甕、平瓶、フラスコ形長頸瓶、坏、坏蓋、土師器短頸壺、坏、鉢であった。尚、図示し得なかったが須恵器提瓶、フラスコ形長頸瓶も検出された。(佐藤)



第22図 堂場7号墳出土遺物(1)



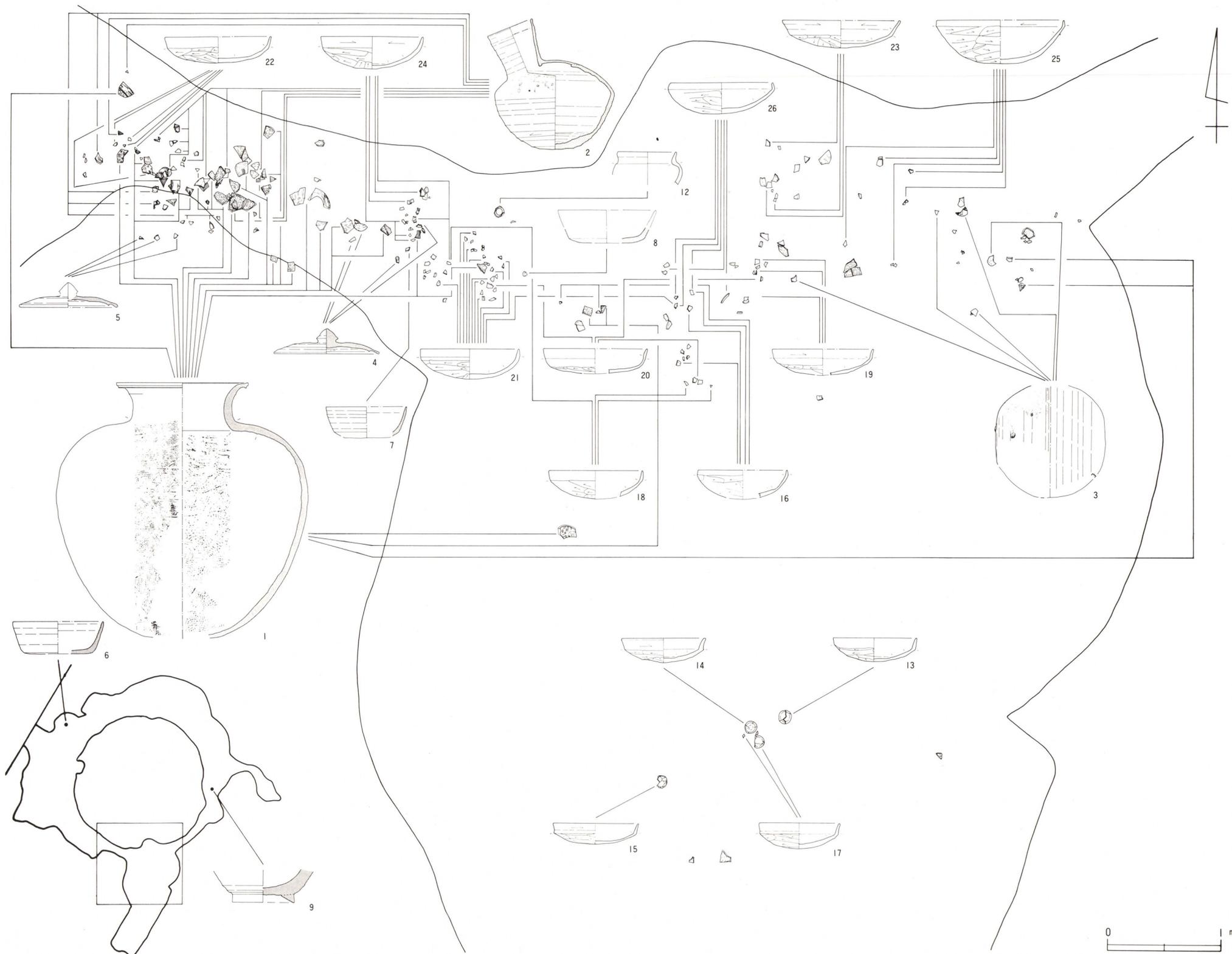
7号墳土層

1. 黒色土 スコリアを多く含みザラザラする。2層より若干明るい。
2. 黒色土 ローム粒子若干含みサラサラする。砂質有り。
3. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、白色火山灰粒子含む。2層の照りを受け黒味がかかる。4層より暗い。
4. 暗褐色土 ローム粒子、3層より多量のロームブロック含む。5層より暗い。
5. 暗黄褐色土 4層より大型のロームブロック含む。6層より暗い。
6. 黄褐色土 ロームブロックを多量含む。粘質有り。1次堆積層(肩部崩壊土か?)
7. 暗褐色土 ローム粒子、白色スコリア粒子を多量含む。
8. 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒色ブロックが混在して含有。ややしまり有り。
9. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック含む。2・3層の照りを受け黒味がかかる。2・3層より明るく4層より暗い。

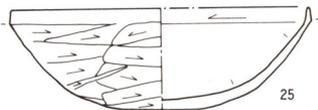
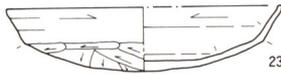
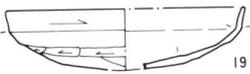
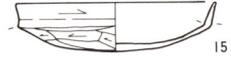
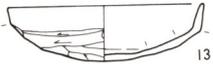
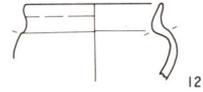
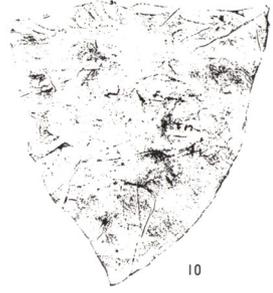
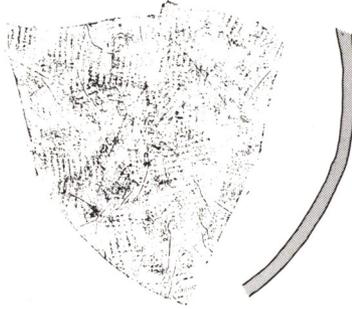
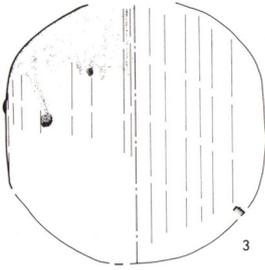
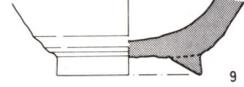
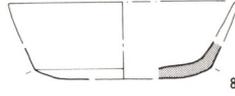
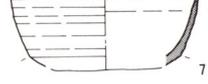
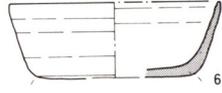
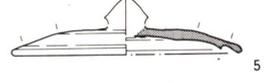
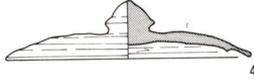
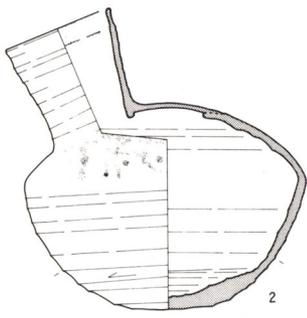
10. 黒色土 スコリアを多量に含みザラザラする。11層より明るい。
11. 黒色土 ローム粒子微量含みサラサラする。
12. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック含む。11層の照りを受け黒味がかかる。11層より明るく13層より暗い。
13. 黄褐色土 ロームブロックを多量、径2cm程の礫を含む。粘質有り。
14. 黄褐色土 ロームブロックを13層より多量含む。
15. 暗茶褐色土 Aスコリアを多量含む。フカフカしてしまりなし。現表土層。
16. 暗茶褐色土 Aスコリアが純層に近く堆積。15層より明るい。
17. 暗褐色土 ロームブロック含む。Aスコリア降下以前の表土層。
18. 暗褐色土 ロームブロックを多量、Aスコリア含む。17層より明るい。
19. 黒色土 ローム粒子含む。スコリア土壌に關係する層か?
20. 攪乱 ロームブロック、黒色ブロックが混在する。
21. 攪乱 Aスコリアを多量含む。
22. 攪乱 スコリア互層に堆積。
23. 攪乱 Aスコリア多量に含む。
24. 攪乱 Aスコリアを塊状に含む。



第23図 堂場7号墳土層図



第24図 堂場7号墳遺物接合関係図



第25図 堂場7号墳出土遺物(2)

堂場7号墳出土遺物(第22・25図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
大甕	1	口径 23.1 器高(44.1)	胎・雲母 白色粒子多 微砂 整・外面 胴部平行タタキ後肩部～胴部中央にかけて7本/1cmのカキメ 内面 胴部青海波タタキ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・暗灰白色 出・11・15・17層 残・1/2 備・底部打ち欠きか?
平瓶	2	口径 (5.9) 器高 15.8 肩径 14.9	胎・黒色粒子 白色粒子 微砂 緻密 成・底部と胴部接合 天井部は円形粘土板貼付 口縁部接合 整・外面 ナデ 底部回転ヘラケズリ 内面ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良(堅緻) 自然釉 色・明灰白色(釉暗緑色) 出・15・17層 残・胴部3/4 口縁部1/4 備・東海産
フラスコ形長頸瓶	3		胎・白色粒子 微砂 緻密 成・天井部の閉塞は円形粘土板 整・内外面ロクロナデ(反時計回り) 形・胴部中央縦位に沈線有 焼・普(自然釉かかる) 色・暗青灰色(釉暗緑色) 出・11・15層 残・図示の1/2 備・東海産
坏蓋	4	口径 13.0 器高 3.1 かえり径 10.4	胎・白色粒子多 微砂 砂粒多 小石少 成・かえりは押し出し 鈕貼り付け 整・外面 天井部ロクロナデ 他ヘラケズリ(反時計回り) 内面ロクロナデ 鈕裏部ユビナデ 焼・普 色・灰白色 出・15・17層 残・ほぼ完形
坏蓋	5	口径(12.2) かえり径 (10.0)	胎・白色粒子多 砂粒多 成・かえり押し出し 鈕貼り付け 整・外面ロクロナデ後回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ 焼・普 色・灰白色 出・17層 残・1/4
坏	6	口径(11.2) 器高 (3.9) 底径 (8.4)	胎・白色粒子多 珪岩粒多 砂粒 整・内外面 ロクロナデ 底部反時計回り方向の回転ヘラケズリ 焼・普 色・暗灰色 出・15層 残・1/5
坏	7	口径(10.0)	胎・白色粒子 珪岩粒多 砂粒多 整・内外面 ロクロナデ 底部反時計回り方向の回転ヘラケズリ 焼・普 色・暗灰色 出・15層 残・1/8
坏	8	底径 (9.4)	胎・白色粒子 珪岩粒多 砂粒多 整・内外面 ロクロナデ 底部反時計回り方向の回転ヘラケズリ 焼・普 色・暗灰白色 出・15層 残・図示の1/8
長頸瓶	9	底径 (7.6)	胎・石英 白色粒子 微砂 緻密 成・高台貼付 整・外面 ロクロナデ 内面 ナデ 焼・普 色・明灰白色 出・2層 残・図示1/4
大甕	10		胎・雲母 白色粒子 微砂多 整・外面 格子目タタキ 内面 青海波タタキ後ユビナデ 焼・普(サンドイッチ状) 色・暗灰白色 出・11層 残・胴部一部
大甕	11		胎・雲母 白色粒子 微砂多 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タ

短頸 壺	12	口径 5.3	タキ後ユビナデ 焼・普 色・暗青灰色 出・11層 残・胴部一部 胎・石英 雲母 微砂多 整・外面 胴部ヘラケズリ (風化不明瞭) 内 面 胴部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・やや悪 色・淡橙褐色 出・17層 残・1/2
坏	13	口径 10.4 器高 2.9	胎・石英 雲母 角閃石 白色粒子 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・良 色・橙 褐色 出・13層 残・完形
坏	14	口径 10.4 器高 3.0	胎・石英 雲母 角閃石 白色粒子 微砂多 小石 整・外面 体部ヘ ラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・13層 残・完形
坏	15	口径 10.6 器高 2.6	胎・石英 雲母 角閃石 白色粒子 微砂多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ (風化不明瞭) 口縁部ヨコナデ 焼・やや悪 色・橙褐色 出・13層 残・体部 口縁部1/2
坏	16	口径 11.0	胎・雲母 角閃石 白色粒子 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・11・17層 残・体部1/2 口縁部3/5
坏	17	口径 10.2 器高 3.2	胎・石英 雲母 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ (風化不明瞭) 焼・やや悪 色・橙褐色 出・ 13層 残・完形
坏	18	口径 11.6 器高 (3.5)	胎・石英 雲母 角閃石 微砂 砂糖多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 (黒斑有) 色・ 淡橙褐色 出・11・12層 残・体部3/4 口縁部1/3
坏	19	口径 12.5	胎・石英 白色粒子 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・淡橙褐色 出・ 11層 残・1/2
坏	20	口径(12.8)	胎・石英 角閃石 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・悪 色・橙褐色 出・11・ 17層 残・1/2
坏	21	口径 12.2 器高 3.7	胎・石英 雲母 角閃石 微砂多 小石 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 焼・普 (黒斑有) 色・淡橙褐色 出・ 15・17層 残・体部3/4 口縁部
坏	22	口径(13.1) 器高 (3.2)	胎・石英 雲母 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 (黒斑有) 色・淡橙褐色 出・ 3層 残・1/6
皿	23	口径(14.6)	胎・雲母 角閃石 白色粒子 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内

坏	24	器高 3.4	面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 出・15・17層 残・2/5
		口径 12.6 器高 4.0	胎・石英 雲母 角閃石 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内 面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普（黒斑有） 色・ 淡橙褐色 出・15・17層 残・ほぼ完形
坏	25	口径(15.8) 器高(5.4)	胎・石英 雲母 角閃石 微砂多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体 部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・11・ 15・17層 残・1/4
坏	26	口径 12.7 器高 3.8	胎・石英 雲母 角閃石 白色粒子 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズ リ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡 橙褐色 出・11層 残・体部 口縁部1/2

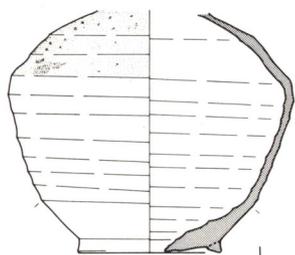
8号墳（第26・28図、附図9、写真図版12・13）

8号墳は調査区の南隅に存在する。北西側で7号墳、東側で9号墳に接する。古墳の南側は調査区外にかかり、全体の約 $\frac{1}{2}$ を調査した。周溝は4箇所途切れブリッジ状を呈する。径21m程の円墳であると考えられる。墳丘は完全に消滅していた。

繁雑さを避けるため、西側より順次周溝1、2、3、4、5と呼称し説明していくこととする。

周溝幅は周溝5の最大部で11.3m、周溝1の最小部で1.4mと一様ではない。周溝1、2は極めて近接しているが、古墳築造面と遺構確認面との高低差を考慮すれば、本来は連続していた可能性がある。また周溝3、4の間は完全に攪乱されており、ブリッジ状を呈していたのか連続していたのかは不明である。周溝はハードロームを掘り込んでいたが、周溝5の調査区端寄りの部分はハードロームが欠如し青灰色の砂層を掘り込んでいた。そのため調査当初この砂層が底面と認定できず若干掘り過ぎてしまった。周溝内からの礫の出土は周溝1に集中しており、他からは殆ど出土していない。多くは拳大程の礫であるが、石室材と考えられる加工痕のある大型の角閃石安山岩も出土している。

遺物は周溝5から内側より転落する状況で須恵器長頸瓶、土師器坏が出土している。（佐藤）



第26図 堂場8号墳出土遺物



堂場 8 号墳出土遺物 (第26図)

器種	番号	法量 (cm)	特 徴
長頸 瓶	1	底径 7.6	胎・黒色粒子 微砂 緻密 成・ロクロ成形 高台貼付 整・外面 ロ クロナデ後底部付近ヘラナデ 内面 ロクロナデ 焼・良 (自然釉かか る 底部内面釉だまり有り) 色・暗灰白色 (釉 暗緑色) 使・底部 焼成後外側より穿孔 出・16層 残・図示の上半1/2欠損 備・東海産
坏	2	口径(12.8)	胎・石英 雲母 白色粒子 微砂 砂粒多 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・1/8
坏	3	口径(11.9)	胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部ヘラケ ズリ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・1/8

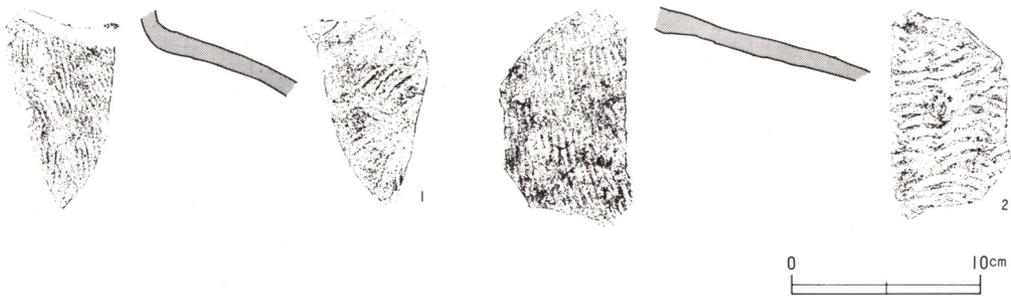
9 号墳 (第27・28図、附図10、写真図版13)

9号墳は調査区の東隅に存在する。北西部で2号墳、南西部で8号墳に接するが、ブリッジ部を残し、東側の大部分が調査区外にかかるため全容は不明である。確認面直上は建物による攪乱が著しくて、墳丘及び主体部は不明である。

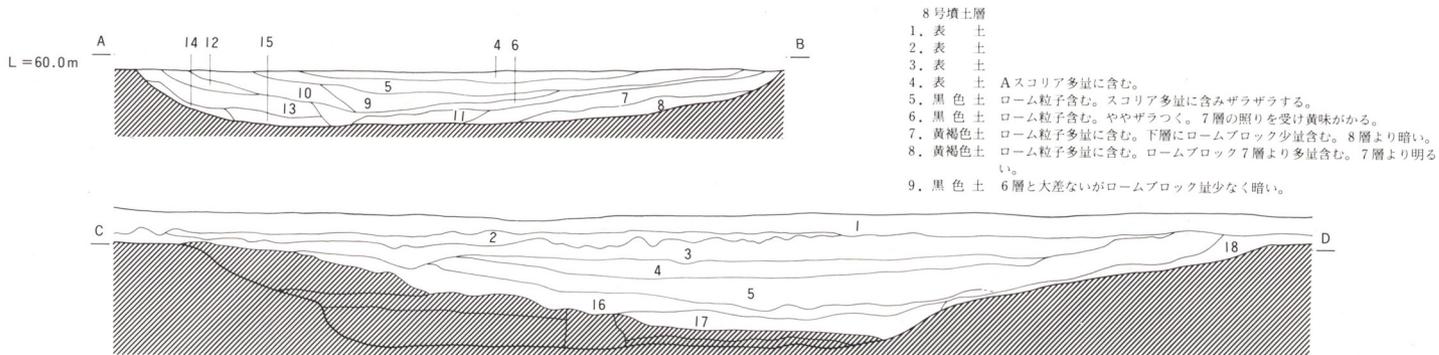
周溝は北西側で途切れブリッジとなる。完掘していないため不明であるが、ブリッジ寄りにコーナーを持つため、形態としては方形になるとも推定される。方墳とみなした場合の規模を復原してみると、一辺13.5mになるものと思われる。周溝幅は最大で7.5m、最小で2.9mを測ることができる。コンタラインを検討すると、いくつかの単位を見出すことができ、摺鉢状に落ち込む箇所も確認される。最も深いのは南側の周溝で、確認面より1.5mを測る。この落ち込みは、オーバーハング状を呈しているが、特殊な施設とは考えられず、墳丘部の土砂採取が目的であると推定できる。ブリッジ両側の周溝は浅くなる。

尚、古墳の主軸は方墳と考えた場合N-45°-Eである。

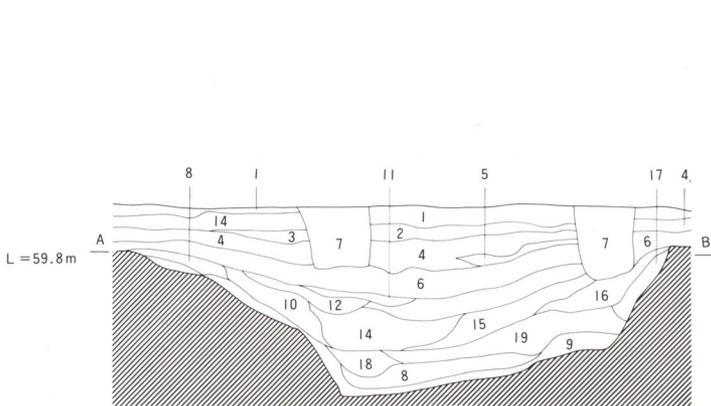
遺物の出土は、南側周溝の先端より、須恵器大甕の破片が2点、数点の土師器片が検出されたのみで、石材と思われる礫は検出されなかった。(井上)



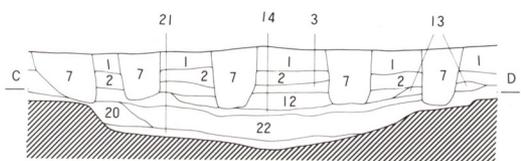
第27図 堂場 9 号墳出土遺物



- 8号墳土層
1. 表土
 2. 表土
 3. 表土
 4. 表土 Aスコリア多量に含む。
 5. 黒色土 ローム粒子含む。スコリア多量に含みザラザラする。
 6. 黒色土 ローム粒子含む。ややザラつく。7層の照りを受け黄味がかかる。
 7. 黄褐色土 ローム粒子多量に含む。下層にロームブロック少量含む。8層より暗い。
 8. 黄褐色土 ローム粒子多量に含む。ロームブロック7層より多量含む。7層より明るい。
 9. 黒色土 6層と大差ないがロームブロック量少なく暗い。



- 9号墳土層
10. 暗褐色土 ローム粒子 ロームブロックを霜降り状に含む。9層より明るく13・14層より暗い。
 11. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。7層よりやや暗い。
 12. 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む。10・14層より明るい。
 13. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック含む。10層より明るい。
 14. 黄褐色土 18層より小型のロームブロック多量に含む。
 15. 暗褐色土 やや大型のロームブロック含む。14層より明るく12層より暗い。
 16. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量に含む。黒色ブロック少量含む。
 17. 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック含む。砂を多量に含みサラサラする。
 18. 黄褐色土 ロームブロック多量に含みバサバサする。



1. 表土 スコリア、ロームブロック含む。しまりなくフカフカする。現表土。
2. 表土 Aスコリア多量に含む。純層に近い。
3. 表土 Aスコリア含む。4層より明るい。
4. 表土 Aスコリア多量、ローム粒子、ロームブロック含む。ややしまり有り。
5. 表土 Aスコリア多量に含む。やや黒味がかかる。固くしまる。
6. 表土 ローム粒子、ロームブロック含む。4層より少量のAスコリア含む。4層より明るい。
7. 攪乱 礫多量に含む。
8. 暗褐色土 スコリア粒、ロームブロック、黒色ブロック含む。
9. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。砂利含む。
10. 黒色土 ローム粒子、ロームブロック含む。14層より明るい。
11. 暗褐色土 ローム粒子含む。スコリア多量に含みザラザラする。12・13層より明るく5層より暗い。
12. 黒色土 13層より多量のローム粒子、ロームブロック含む。スコリア多量に含みザラザラする。13層より明るい。
13. 黒色土 基本的に12層と大差ない。14層より明るく12層より暗い。
14. 黒色土 ローム粒子含む。ややサラサラする。
15. 黒色土 基本的に10層と大差ないがロームブロック量少なくやや暗い。
16. 暗褐色土 19層よりやや大型のローム粒子含みや明るい。
17. 黄褐色土 大型のロームブロック含む。
18. 黒色土 ローム粒子、砂利含む。10・14層より明るい。
19. 暗褐色土 ローム粒子含む。16層よりやや暗い。
20. 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量に含む。
21. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。20層より明るい。溝底面風化層か？
22. 黄褐色土 ローム粒子 ロームブロック多量、黒色ブロック少量含む。20層より暗い。



堂場 9 号墳出土遺物 (第27図)

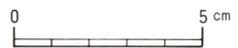
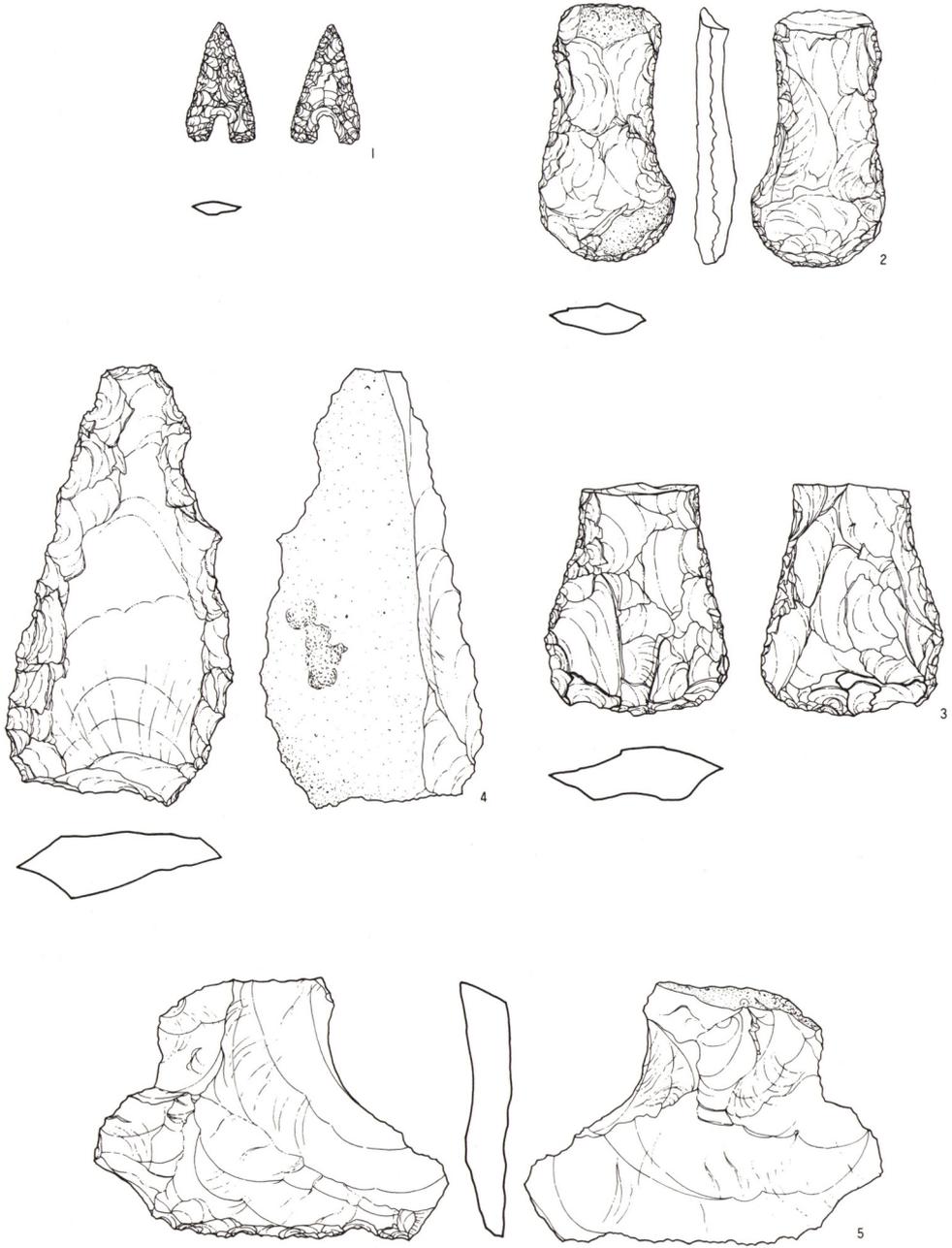
器種	番号	法量(cm)	特 徴
大甕	1		胎・白色粒子多 微砂 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 頸部外内面ヨコナデ 焼・普 色・暗青灰色 残・頸部及び肩部一部
大甕	2		胎・白色粒子多 微砂 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 焼・普 色・暗灰白色 残・肩部一部

その他の遺物 (第29・30図)

調査区内からは、石器、縄文土器、埴輪、かわらけ等が出土しているがそれらを一括してここで取り扱う。埴輪については、4号墳、8号墳から若干出土しているが、時期的にみて埴輪の樹立を考えがたいのでここで取り扱うことにした。

種別	番別	特 徴
石鋏	1	チャート製 完形品 転摩なし 若干風化 茶色味帯びた黒色 両面に素材時のポジティブ面有り 左右はシンメトリー えぐり部分両面とも1回の剝離で形成 縁辺部は比較的深い押圧剝離で並列に調整 長さ3.2cm 幅0.9cm、厚さ0.4cm
打製	2	表面発泡し安山岩又は玄武岩 完形品 転摩なし 風化やや進行 やや暗い灰色 片面の上下に自然面残存 上辺は古く折れる 両面とも左右縁辺から大きく剝離後左右下縁部を細かく調整 階段状剝離著しい 刃縁部から左右縁辺部下位に潰れ痕有り 刃部の一部に使用による摩滅有り 長さ7.0cm 幅3.7cm 厚さ0.8cm
打製 石斧	3	安山岩 上半分古く欠損 転摩なし 風化やや進行 黄色味帯びた灰色 素材時のポジティブ面と思われる面がわずかに残存 両面とも左右より荒く剝離後縁部の調整細かい階段状剝離著しい 左右中央部の縁辺部に潰れ痕あり 下辺の刃縁部の一部に使用によるとと思われる剝離有り 長さ63cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm
未製 品	4	安山岩 完形品 転摩なし 風化やや進行 自然面黄色味帯びた灰色 片面の大部分に自然面残存 裏面の中央に縦長のポジティブ面有り 自然面の残存する面に3枚の剝離面があるが素材時に加工されたもの ポジティブ面左右両縁部とも荒い調整が片面側からのみ行われる 細部調整なし 打製石斧又は削器の未製品と思われる 長さ11.9cm 幅6.2cm 厚さ1.8cm
直線 刃削 器	5	硅岩 完成品 転摩及び風化なし 暗褐色 自然面打面より剝離された剝辺を素材とし両面に大きなポジティブ面及びネガティブ面有り ポジティブ面に打瘤裂痕有り 調整は下縁部をポジティブ面からのみ剝離し刃縁部形成 剝離痕比較的荒い 長さ7.1 厚さ1.5

縄文	6	胎・石英 角閃石 酸化鉄粒 微砂多 砂粒 整・地文 R L 口縁部ナデ 焼・普色・黄白色
縄文	7	胎・石英 雲母 砂粒多 整・外面 Lの撚糸文 焼・普色・橙褐色
縄文	8	胎・石英 結晶片岩 砂粒多 整・地文撚糸文 2条の沈線 焼・普色・暗橙褐色
縄文	9	胎・雲母 角閃石 酸化鉄粒 角閃石 微砂多 整・地文 R L 隆帯現存5本 隆帯上は上下で鋸歯状になるように刻み 焼・普色・暗橙褐色
縄文	10	胎・石英 雲母 砂粒 整・R L 焼・普色・赤褐色
縄文	11	胎・雲母 結晶片岩 砂粒多 整・地文 R L 後左上りの条痕 焼・普色・赤褐色
縄文	12	胎・石英 雲母 微砂多 整・縦位の条痕 焼・普色・黄白色
縄文	13	胎・石英 雲母 微砂多 整・縦位の条痕 焼・普色・黄白色
縄文	14	胎・石英 雲母 微砂多 整・縦位の条痕 焼・普色・黄白色
縄文	15	胎・石英 雲母 微砂多 整・縦位の条痕 焼・普色・黄白色
大甕	16	胎・白色粒子多 緻密 整・外面 ヨコナデ後櫛描波状文(10条) 内面 頸部指頭押さえ ヨコナデ 焼・普色・暗青白色 残・口縁部一部
円筒	17	胎・雲母 酸化鉄粒 砂粒多 小石 整・外面 タテハケ7本/2cm 突帯部ヨコナデ
埴輪		内面 板状工具ナデ 形・透孔円形 焼・普色・橙褐色 出・8号墳
円筒	18	胎・雲母 結晶片岩 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 タテハケ10本/2cm 突帯部ヨコナデ 内面 斜ハケ9本/2cm 焼・普色・暗褐色 出・8号墳
埴輪	19	胎・雲母 白色粒子 角閃石 砂粒多 整・外面 タテハケ7本/2cm 突帯部ヨコナデ 内面 左斜方向のユビナデ 焼・普色・赤褐色 出・3号墳
埴輪	20	胎・石英 角閃石 酸化鉄粒 砂粒多 整・鈴部丁寧なナデ 本体との接合部ヨコナデ 鈴の線刻は刀子 形・本体との接合はソケット状 焼・普色・橙褐色 出・4号墳
かわらけ	21	法・口径(8.2) 器高(2.7) 胎・石英 雲母 角閃石 微砂 成・底部回転糸切り 整・内外面 ロクロナデ 焼・普色・橙褐色 出・4号墳 残・1/4



第29図 堂場地区その他の遺物(1)



第30図 堂場地区その他の遺物(2)

2 ま と め

はじめに

旭・小島古墳群は既に触れたように、埼玉県選定重要遺跡に指定されてはいるが、その実態は不明確な部分が多い。調査された古墳数も今回の9基に、範囲確認調査等による試掘調査されたものを含めても34基にすぎない。この34基という数は、旭・小島古墳群全体の規模から考えればごく僅かであり、全体の様相を知るには不十分である。堂場地区の9基は古墳址でもあり、知り得た情報も限られたものであった。しかし、旭・小島古墳群概観で述べたように、マクロ的に見れば本古墳群形成のプロセスが下野堂遺跡を核として東方向に展開の主軸をもちながら環状に造営されていくという試論を補強することができよう。勿論、ミクロ的に見れば単純に内より外が新しいという訳ではなく、幾つかのグループ(支群)に分化し変遷されていくものであろう。今回は調査年次に報告書刊行ということもあり、十分な分析をすることができなかつたが、旭・小島古墳群全体の問題を含めいずれまた触れる機会もあろう。ここでは調査中に気づいた若干の事実と問題点について触れ報告の責を果たしたい。

設計規格の復原

堂場3号墳は調査の結果主軸をN-31°-Wにもつ内辺約15mの方墳であった。南西の周溝は袈状を呈し途切れるが、この部分のプランは4号墳北側袈状部のプランと相似形であり、点对称の関係にあることが判明した。そこでこの袈状部に着目し、直径を求めると約7mとなる。この直径を24cm(晋尺)、35cm(高麗尺)で除すると29尺、20尺という数値を得ることができ、高麗尺が使用された可能性が高いと推定できる。ここで3.5mの方眼を平面図の上に重ね合わせてみると、各部の数値を割り切ることが可能である。周溝は2箇所ですぐ途切れるため「L」字形を2つ組み合わせたような形態をとるが、北東周溝の外端が検出されておらず推定復原すると、その外辺長がそれぞれ70尺となる。南東側周溝の南端部は、南西袈状部の中心点の延長線状に位置するから、南東側周溝は北西側周溝に対し10尺ずらして設計されていることになる。これは4号墳と調査区外に存在する古墳との間の僅かなスペースに3号墳を築造したことに起因すると考えられる。他の古墳についても規格性の存在することが判明しているがここでは触れないでおく。

古代の尺度は702年(大宝2年)から施行された大宝律令の雑令第30に大尺と小尺の規定があり、大尺を小尺の1.2倍としている。^(註1)この大尺が高麗尺、小尺が唐尺に相当するが、小尺に関しては正倉院御物、平城宮、平安宮から出土しており、およそ29.5~29.8cmの値をとることが知られている。この数値に1.2を乗すると大尺は約35cmの値を示す。しかし高麗尺の使用は大宝律令以前にも認められており、飛鳥寺に使用されているのが古い例である。^(註2)^(註3)^(註4)飛鳥寺は588年に建立が開始されるが、同年に飛鳥寺建立のために百濟から僧侶や仏舎利、寺院建築の技術者などが渡来しており、その前後に高麗尺が伝来した可能性が高い。高麗尺使用の下限については、続日本紀巻第6に713年(和銅6年)の度量の改訂記事があり、大尺を廃し小尺に統一することが記されている。この規定は地方においてもある程度スムーズに施行されたようであり、国分寺、地方官衙には小尺が使用されている。したがって、高麗尺の使用は6世紀末葉から8世紀初頭までの約120年間に渡っており、終末期の古墳の設計には多く使用されたものと思われる。^(註5)^(註6)

編年的位置の検討

各古墳からは前庭部前面周溝を中心に多くの土器群を検出している。これら土器群から編年的位置付けについて検討してみたい。

7号墳からは比較的良好な須恵器のセットが確認された。改めてあげると、大甕・フラスコ形長頸瓶・平瓶・提瓶・長頸瓶・坏・坏蓋で、終末期古墳から出土する須恵器の典型的組成である。このうち平瓶及びフラスコ形長頸瓶は東海産との観察を得ている。^(註7)

さて、比較的研究の進んでいる坏についてみてみると、所謂、身・蓋逆転後のものであり古墳時代以来の蓋に身受けのかえりをもたない「坏H」は存在しない。^(註8) 坏身の口径は10.0、11.2cmと小振りである。蓋は、内面に低いかえりをもつもので、三角形に近い宝珠つまみをもつ。坏身が3個体、蓋が2個体出土しておりセットになるものと思われる。これらの坏・蓋は、宝珠つまみをもち、かえりを有する点で田辺編年Ⅲ期の特徴を備えている。

該期の土器編年については、畿内中枢部の消費遺跡における編年一奈良国立文化財研究所による飛鳥・藤原宮の土器編年がほぼ確立しており、宝珠つまみでかえりをもつ坏蓋は飛鳥Ⅰ～Ⅳ期まで存在している。しかし、飛鳥Ⅰ期の段階では古墳時代以来の「坏H」が主体であり、飛鳥Ⅱ期で「坏H」と「坏G」が相半ばし、飛鳥Ⅲ期において主体的になるという。飛鳥Ⅳ期になると高台付の「坏B」が中心となるというから、飛鳥Ⅲ期に比定されるものと考えられる。坏蓋は全体的に扁平で、かえりも低い^(註10)が、鈕は宝珠つまみで扁平化の傾向はみられない。飛鳥Ⅲ期の標式遺構であるTK217窯出土土器中にも体部が扁平化したものが存在するから、飛鳥Ⅲ期の範疇で捉えることに問題はあまい。

坏・坏蓋は7号墳より確認されたのみであり、他の古墳からは出土しておらず比較することができない。そこで近隣の集落出土のものと比較していくなかでより明確に位置付けておきたい。

児玉工業団地取り付け道路に関連して調査された遺跡の中に、飛鳥Ⅲ期に比定できる資料が存在する。^(註11) 今井G2号住、同5号住、八幡太神南A1号住であり、報告者は今井G2号住・八幡太神南A1号住→今井G5号住の変遷を考えている。今井G2号住・八幡太神南A1号住からは「坏G」に「坏H」が相伴しており、組成のうえでは飛鳥Ⅱ期の様相を呈している。「坏G」は底部に丸味をもっており、平底で直線的に立ち上がる7号墳のものの方に後出的要素がみられる。^(註12) 今井G5号住のなかに平底化したものが見受けられるから、今井G5号住に近いものと位置付けられる。

平瓶は2・4・7号墳から出土しているが、初期のものは体部に丸味があり新しくなるにつれて肩部に稜がつくられ扁平になるという変遷をたどるようでそれに照らし合わせると2→7→4号墳という序列を設定することができよう。特に2号墳のものは全体に丸味がかり、肩部に明瞭な稜をもたない古い形態を呈している。^(註13) 技法的にみても天井部の閉塞をしほり込みによって行っており、古い要素とみることができる。

次に、土師器についてみるまえに今回出土した土師器坏を分類しておく。

A群 丸底で体部が内彎して立ち上がり、口縁部との間に稜をもち緩やかに外反しながら立ち上がるもの。鬼高式の「須恵器模倣坏」の系譜にあるものである。

B群 丸底で体部が内彎して立ち上がり、口縁部が明瞭に内側に屈曲するもの。「丸底内屈口縁形態坏」。

C群 B類ほど明瞭に口縁が屈曲しないもの。

D群 丸底で体部が内彎して立ち上がり、口縁が直立気味に立ち上がるもの。「彎(曲)直立口縁形態坏」。

E群 丸底で体部がゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁が直線的に外方へ立ち上がるもの。

F群 平底のものを一括する。

更に、口径の違いにより3形態に分類しておく。

1類 口径10cm前後

2類 口径11～12cm前後

3類 口径13cm以上

以上の基準に従い土師器坏を分類してみる。

A群1類 第25図13、14、15、17

A群2類 第6図3、4、第14図8、12、第21図11、第25図、18、19、24、第26図2、3

A群3類 第25図22

B群1類 第14図3、第17図4、7、8、第21図5、6

B群2類 第6図7、第11図6、第14図7、9、14、第17図5、6、第25図16、26

B群3類 第14図16、18、19、20、第17図9、第21図27、30、第25図25

C群1類 第14図5、第21図7、8、10、17

C群2類 第14図6、11、第21図12、13、15、16、22、23、32

C群3類 第14図15、17、第21図24

D群1類 該当なし

D群2類 第6図5、6、第14図4、10、第21図9、14、18、19、20、21、26、28、29、第25図23

D群3類 第21図4、31

E群 第25図23

F群 第14図13、第21図25、第25図20

以上のように形態的特徴から6群14類に分類することができた。古墳出土の土器であり、追葬による多期に亘る祭祀の継続は十分に予想されることであった。5号墳のごとくB群のみ集約できるものもあるが、ほとんどは複数の群に渡っており、同一群のものを一時期としても、時期的な幅を十分に考えねばならない。

A群とB群との間には口縁の形態からみても大きな格差がみられ、A群発展形態としてB群を捉えるには些か無理があり、他に祖型を求める必要がある。B群は所謂「北武蔵型坏」の祖型として捉えられる。このA群とB群の間に「鬼高式」と「真間式」との境界を求めるのは多くの研究者の指摘するところである。^(註14)B群～F群への変化は、型式学的変遷のなかで捉えることができる。B群の「丸底内屈」形態からC群の「丸底内彎」形態へ、更にD群の「彎底直立」形態からF群の「平底」形態のものへという製作工程の省略化としての「手抜き」の結果としてみる事が可能である。

A群が主体的にみられるのは7号墳であり、他古墳からの出土は少ない。但し、2・8号墳のA群

(註15)
2類としたものと比較すると7号墳より厚手で古い様相が窺え、先行する形態を呈している。4号墳は、A群2類のものが2点存在するが、主体はB・C群にあり、A群主体でC群を含まない7号墳よりは後出するものであろう。6号墳はC群が主体でB群を若干含むことから、4号墳より後出すると考えてよい。5号墳はB群に集約され一括性が強く、A群及びC群以下を全く含まないから、7号墳より後出し、4号墳より先行するものと考えられる。

下限を示す資料としては、F群が存在する。平底化の傾向がみられ、ヘラケズリも底部付近のみに施され未調整帯の幅も広がっており新しい要素が見受けられ、4・6・7号墳からそれぞれ1個体ずつ確認されている。集落等においてはF群はD群との共伴が確認されており、本例も個体数が少ないことを理由にD群と共伴するものとして理解しておきたい。(註16)
2・8号墳ではD群が認められるもののF群が共伴しないことからこれらよりは古いものと考えることができよう。

以上をまとめると2・8→7→5→4→6号墳という変遷をたどることができる。7号墳は須恵器の検討から飛鳥III期に編年されA群の土師器坏と共伴するものと考えられる。奈良国立文化財研究所による飛鳥・藤原宮の土器編年は白石太一郎氏によって再検討されておりやや時期を下げて考えられている。この見解には否定的な見方もあり、さらに検討を加える必要もあるが、ここでは白石氏の見解にしたがっておくと、7号墳の7世紀第III四半期(後半)をよりどころにして2号墳が7世紀第II四半期、4・5・6号墳を7世紀第IV四半期を中心におく時期とすることができる。8号墳については須恵器長頸瓶と土師器坏(A群2類)とに隔たりがあるが土師器坏を2号墳と同時期ととらえ、須恵器長頸瓶は土師器D・F群と共伴するものとして捉えておきたい。また、1号墳と3号墳については比較資料に欠けるが、両古墳との接合関係にあった須恵器大甕の出土状況から1号墳が3号墳より新しい可能性があること、3号墳と4号墳の位置関係から3号墳の方が新しいと考えられること、更に3号墳の設計に使用されたであろう高麗尺使用の下限が713年を大きく隔たらないと考えることから4号墳以降、713年以前の時期を想定することができよう。

これらの時期比定はあくまで出土土器によって裏打ちされたものである。したがって必ずしも古墳築造時(第1次埋葬時)の年代を示すものではなく、古墳が墓として機能していた時期の一端を示すにすぎないと考えている。横穴式石室においては追葬がみられることが常であり、6号墳でみられたように追葬時において「かたづけ」行為が行われたとすれば、最終時の土器群が残されている可能性も考えられる。このような見解にたてば、後期・終末期古墳の場合には幾つかの特殊なものを除くと土器や副葬品による年代比定にはおのずから限界が生じるものと思われる。古墳築造時に確実に伴うものは石室であり、その型式学的研究が大きな課題となろうか。今回は石室に関しては良好な資料に恵まれず、検討できなかったが、いずれ機会をみて検討してみるつもりである。

おわりに

今回は土器の出土層位について全て記録して取り上げるという方法を実践した。その結果、複数の層から出土したものが接合したり、周溝外側より出土したものがあったこと、また複数の古墳に渡って接合関係が認められるなど興味ある事実を得ることができた。また、搬入須恵器の供給問題などまだ触れなければならない多くの問題を残している。これらの分析については触れる用意もあったが、もう少し資料の蓄積を待つて改めて考察したいと考えている。

最後になったが、本報告書を草するにあたり資料の実見等を含め多くの人々の御支援があった。本紙上を借りて御礼申し上げます。(佐藤)

註)

- 1 黒板勝美編『新訂 増補 国史大系 令義解』 1974
- 2 東京国立博物館『特別展 正倉院宝物』 1981
- 3 奈良国立文化財研究所「木器集成図録」『奈良国立文化財研究所史料第27冊』 1985
- 4 前掲註3
- 5 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告書」『奈良国立文化財研究所学報第5冊』 1958
飛鳥寺の下層からはTK47型式の須恵器が出土しており、588年の建立開始と矛盾はない。群馬県観音塚古墳の石室の設計規格に高麗尺が使用されているとの指摘があるが、出土した須恵器はTK209型式併行と考えられこの段階には地方にも高麗尺が普及していたことが窺える。尾崎喜左雄『横穴式石室の研究』 1966
- 6 前期難波宮や川原寺ではそれぞれ1尺29.2、30cmの基準尺が使用されていることが知られており大宝令に規定された大尺とは異なった尺の存在したことを物語っている。伊藤太作「土地と建物の尺度」『季刊 考古学』第22号 1988
- 7 平瓶が湖西窯産、フラスコ形長頸瓶が猿投窯産との観察を得ている。
- 8 器種の分類については奈良国立文化財研究所の分類による。奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告VII」『奈良国立文化財研究所学報第26冊』 1975
- 9 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」『奈良国立文化財研究所学報第31冊』 1977
- 10 田辺昭三『陶邑古窯址群I』1977 平安学園考古クラブ
- 11 赤熊浩一・富田和夫「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 12 第25図7は底部を欠失しており不明であるが、立ち上がりの形態から丸底になる可能性がある。
- 13 提瓶の閉塞には比較的多く見られる。
- 14 鬼高一真間期の間の変革を、土師器における神祕的イデオロギー付着傾向の後退と貢納形態の変化に伴う「公民的イデオロギー」への変化として捉えている。鈴木徳雄「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態—古代武蔵国における土師器生産と交易—」『土曜考古』第9号 1984
- 15 より厳密な意味ではA群の先行形態として捉えるべきであろう。
- 16 皂樹原H-14号住等でD群との共伴が知られる。篠崎 潔・金子彰男・平田重之『皂樹原・檜下遺跡発掘調査概報II』1987 篠崎 潔・金子彰男両氏のご厚意により実見。
- 17 隼上り窯を再検討した菱田哲郎氏は、TK217段階を隼上りII・III段階に2分し、隼上りIII段階を前期難波宮の整地土層直下の土器群に比定しており、前期難波宮を長柄豊碕宮とし『日本書紀』白雉元年(650年)の記載を整地の段階とすれば、隼上りIII段階の下限を7世紀中葉におくことが可能であるとしている。菱田哲郎「幾内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第59巻第3号 1986

写 真 图 版



堂場 1 号墳（南西から）



堂場 1 号墳土器出土状況

写真図版 2



堂場 2 号墳 (南西から)



堂場 2 号墳土器出土状況



堂場 3 号墳 (南から)



堂場 3 号墳磔検出状況 (北から)

写真図版 4



堂場4号墳（南から）



堂場4号墳礫検出状況



堂場4号墳石室



堂場4号墳石室棺床面



堂場 4号墳土器出土状況



堂場 4号墳土器出土状況



堂場 5 号墳 (南から)



堂場 5 号墳土器出土状況



堂場 6 号墳 (南から)



堂場 6 号墳磔検出状況



堂場 6 号墳土器出土状況



堂場 6 号墳耳環出土状況

写真図版10



堂場7号墳（北東から）



堂場7号墳土器出土状況（南から）



堂場7号墳土器出土状況



堂場7号墳土器出土状況



堂場 8 号墳（北から）



堂場 8 号墳土器出土状況



堂場8号墳土器出土状況



堂場9号墳（西から）

写真図版14



堂場3・4号墳（南から）



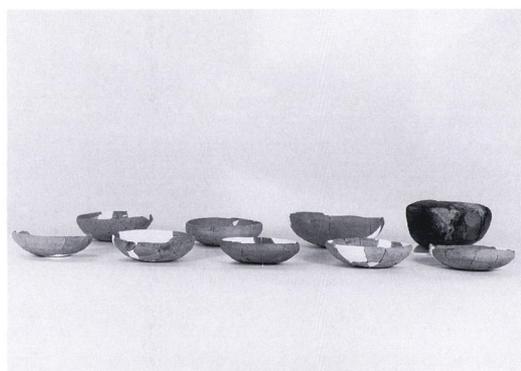
堂場地区北半全景（南から）



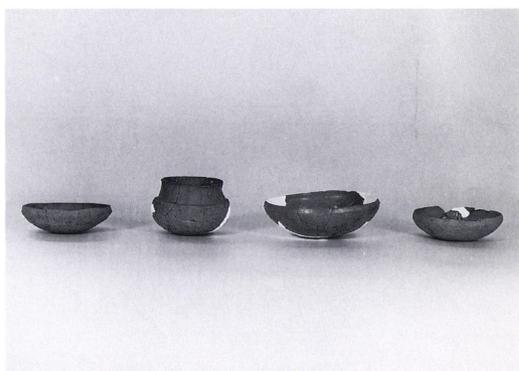
1号墳(4図-1)



2号墳(6図-1)



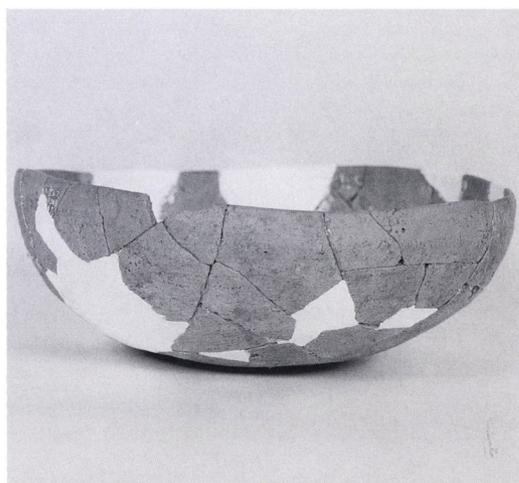
4号墳出土土器



5号墳出土土器

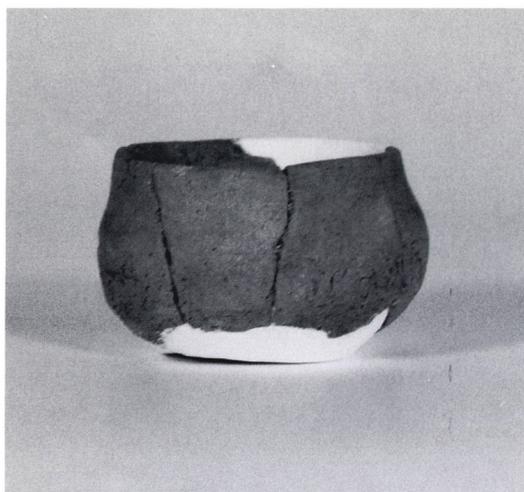


6号墳出土土器



6号墳(21図-4)

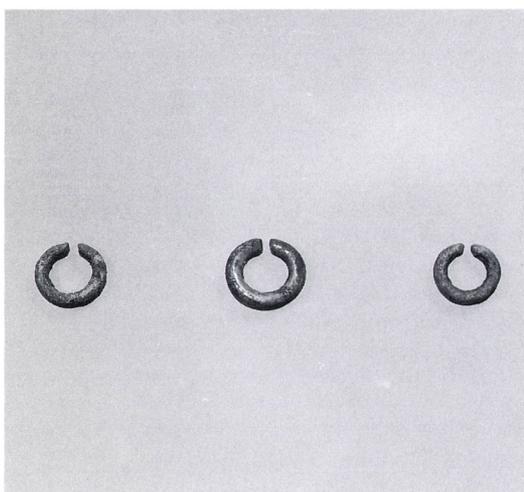
写真図版16



6号墳(21図-3)



6号墳(21図-13)



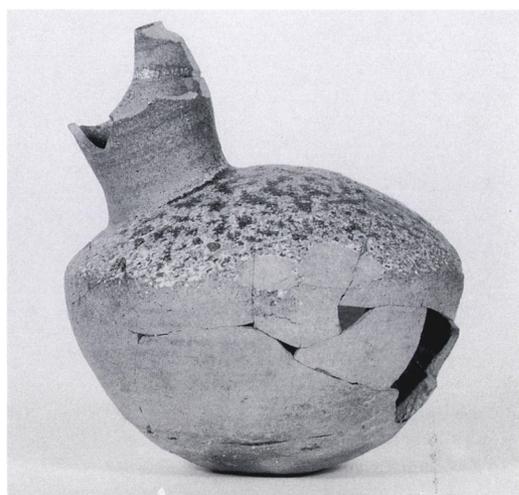
6号墳出土耳環(18図)



7号墳出土土器



7号墳(22図)



7号墳(25図-2)

あ と が き

文明18年8月頃当地域を通過した聖護院門跡道興准后はその紀行文『廻国雑記』に「けふここに^おしまか原をきてとへハ わか松しまハ程そ遥けき」と歌を残した。

この「おしまか原」は広く旭・小島古墳群が分布し、昭和30年代後半以降工場化住宅化が進行し、加えて区画整理も計画され、更に変わろうとしている。

そんな文学的感慨とはうらはらに今回報告する調査は過酷なものであった。担当者と補助員とで方法論、日程など充二分な議論を積み重ねたが、一連の作業は補助員佐藤・井上両氏に対して多大な労苦を強いる結果となった。

考古学の基本に立ちかえった調査とはいえ、限られた日程と極暑のなか、筆舌に尽し難かったといっても過言ではなからう。

ともすれば行政発掘という機械的対応に陥る可能性を敢て跳のけ真剣に取り組んでもらった。

多大な労苦を強いた担当者の一
人として、発掘・整理・報告書刊
行の一連の作業に従事された皆様
に心よりお礼申しあげたい。(長)

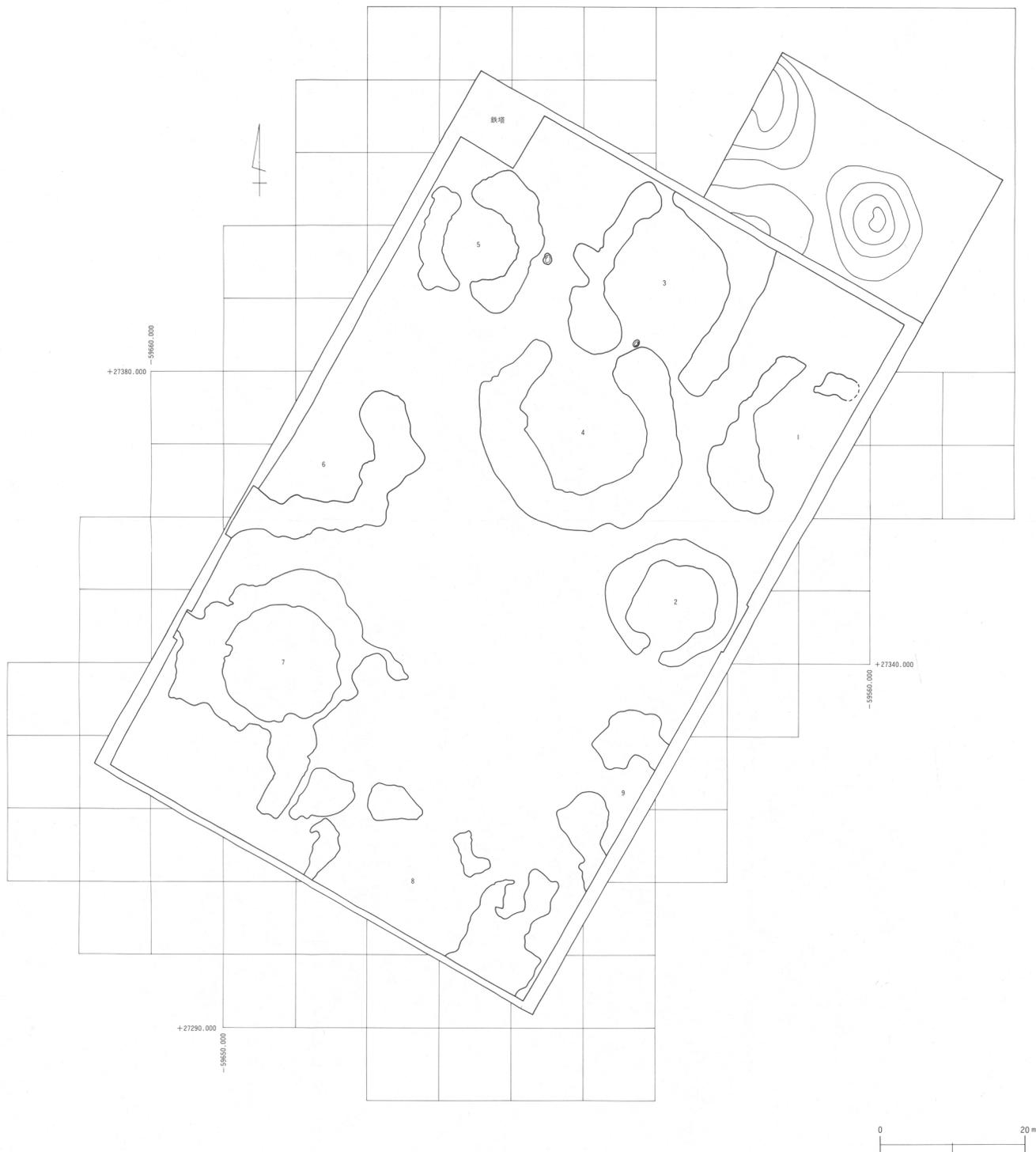
旭・小島古墳群発掘調査報告書 I

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月25日 発行

発行 本庄市教育委員会
埼玉県本庄市銀座1-1-1

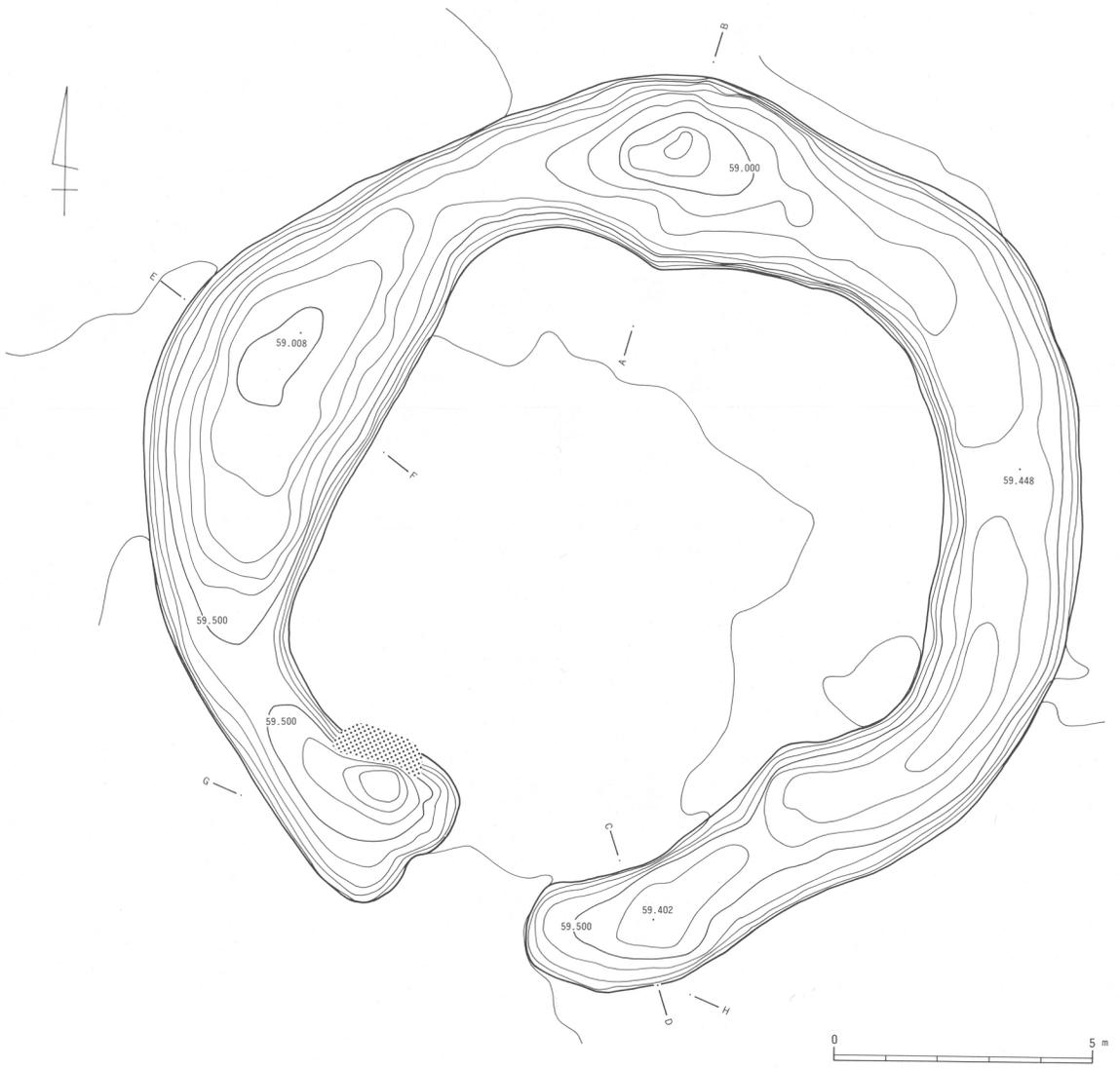
印刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67



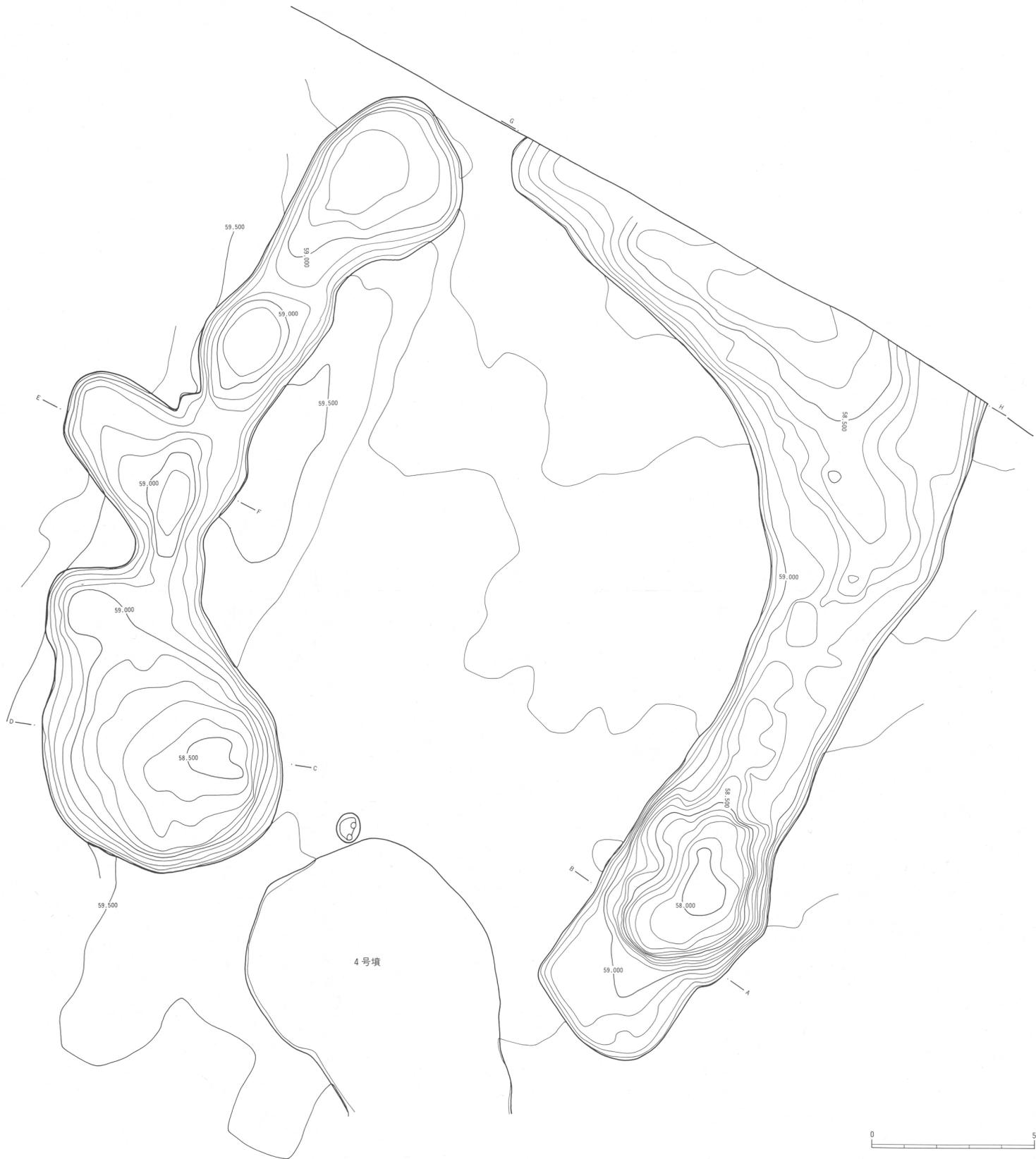
附圖1 旭・小島古墳群堂場地区全測図



附圖 2 堂場 1 号墳



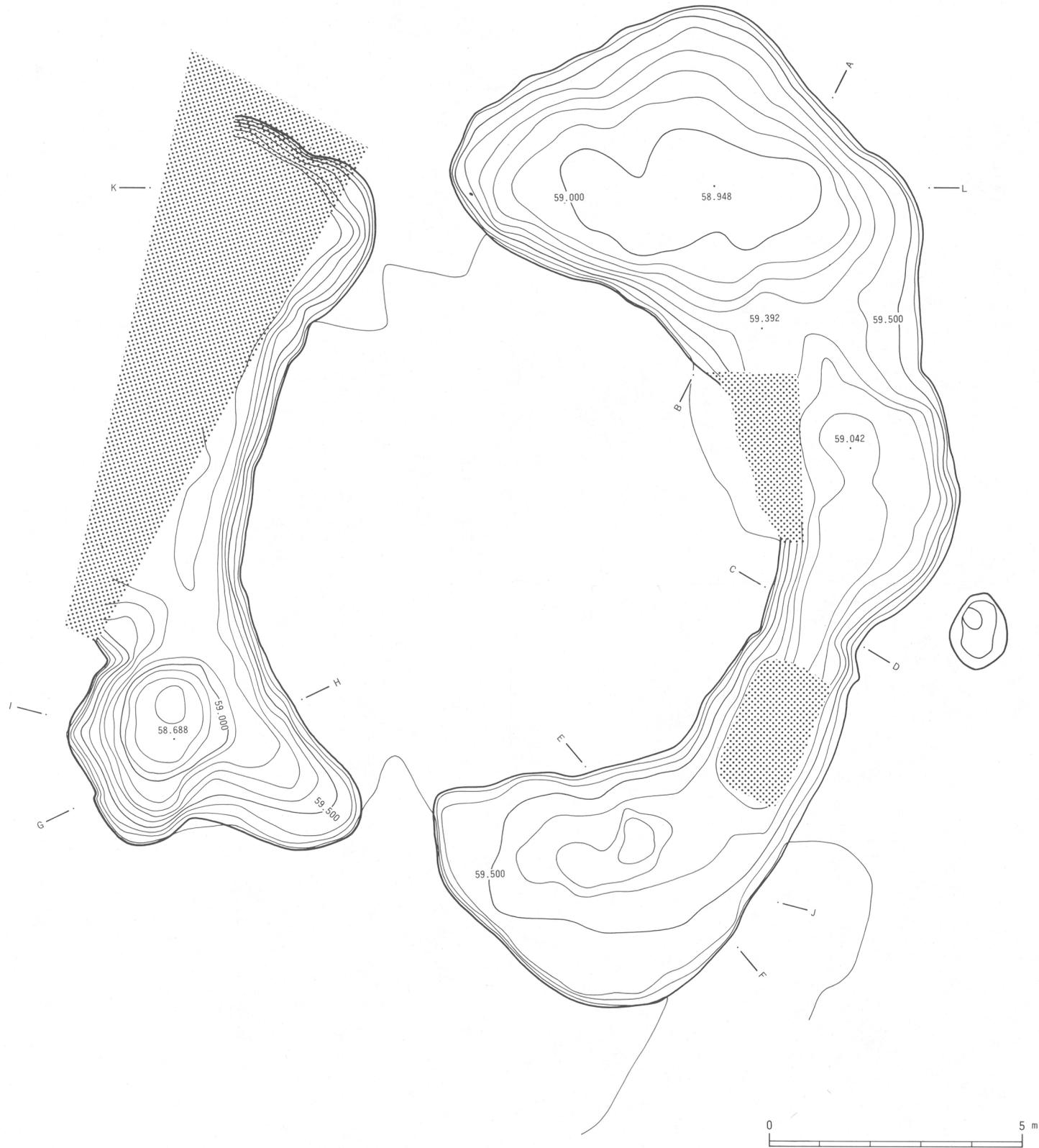
附圖3 堂場2号墳



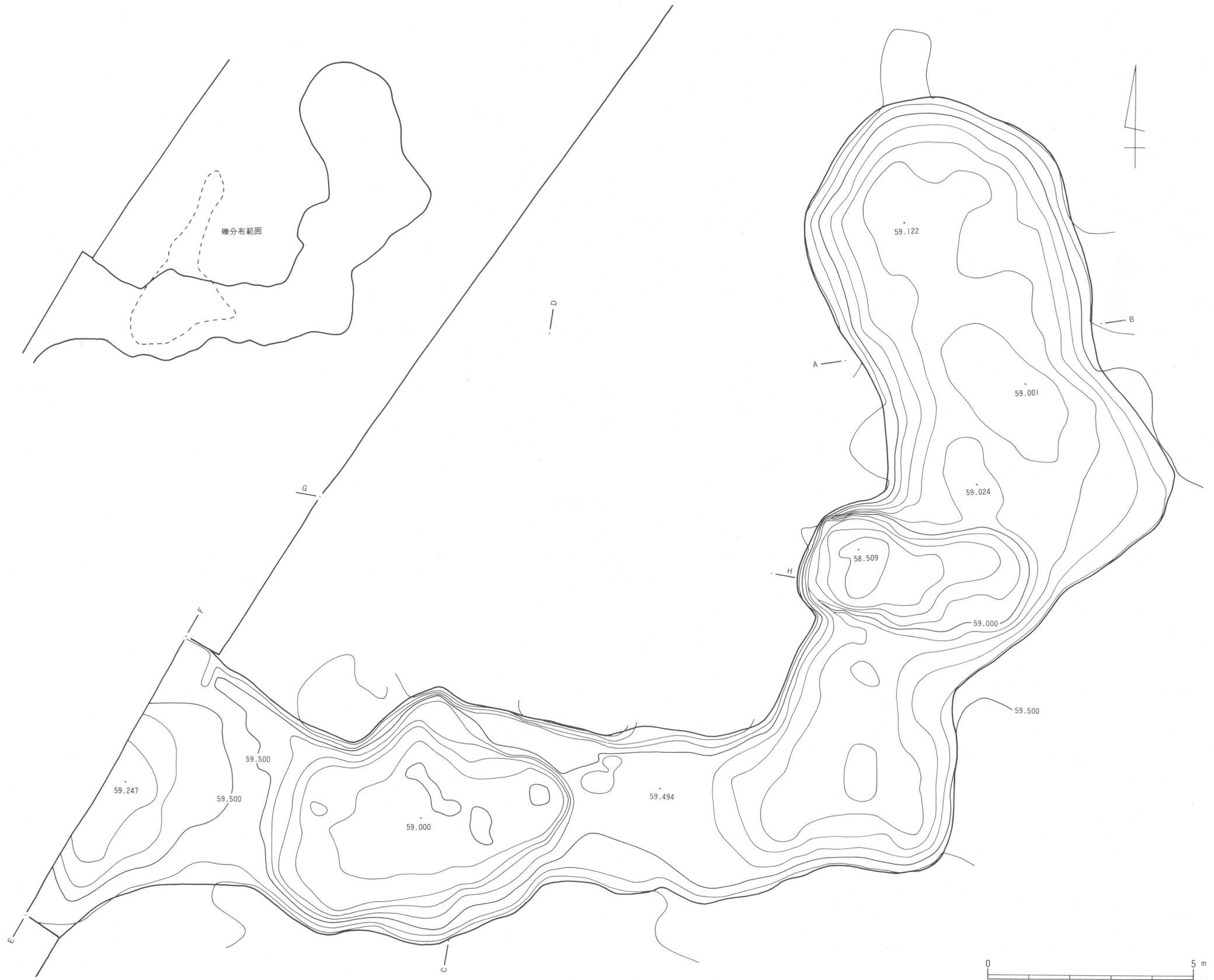
附図4 堂場3号墳



附图5 堂場4号墳



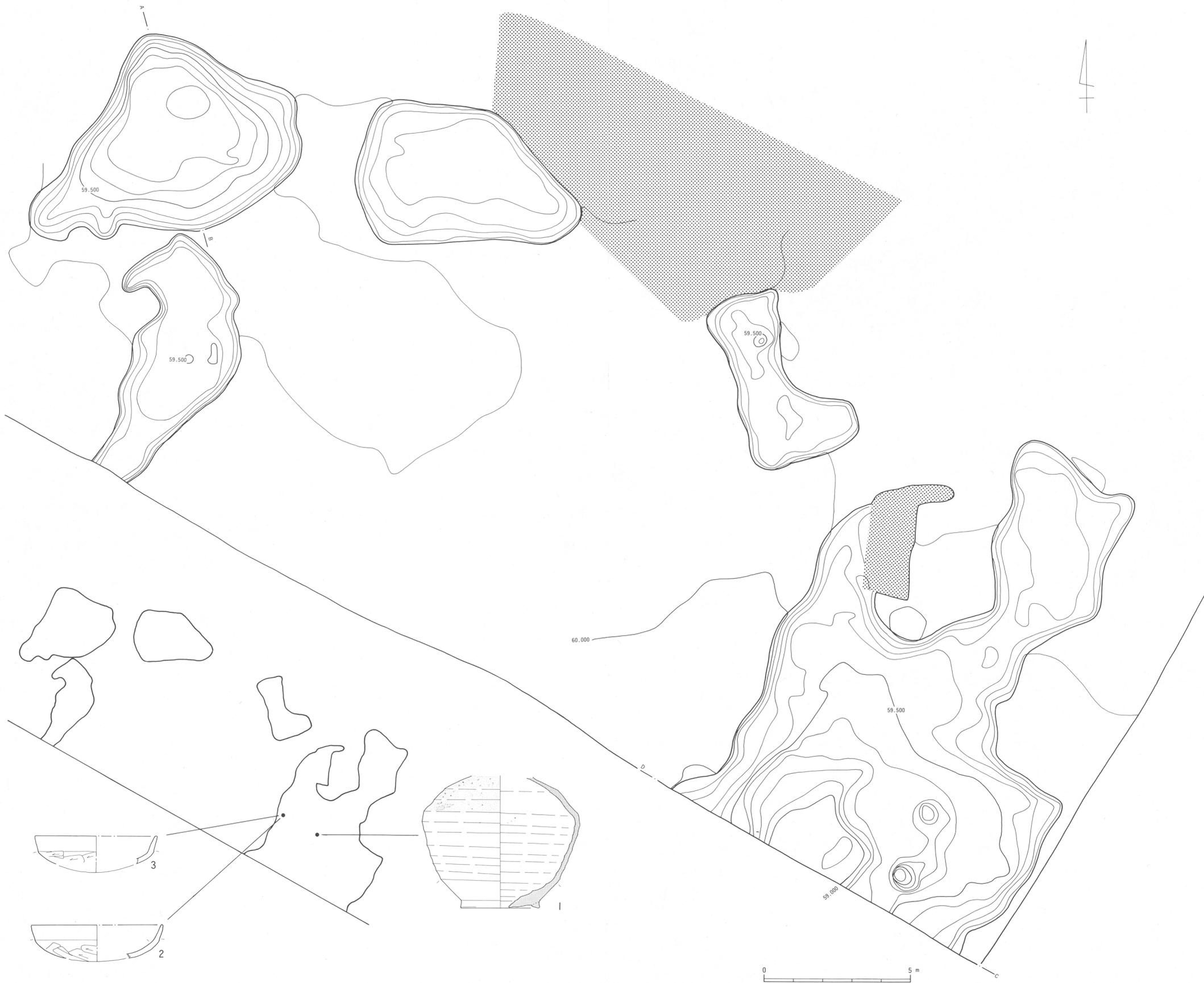
附圖 6 堂場 5 号墳



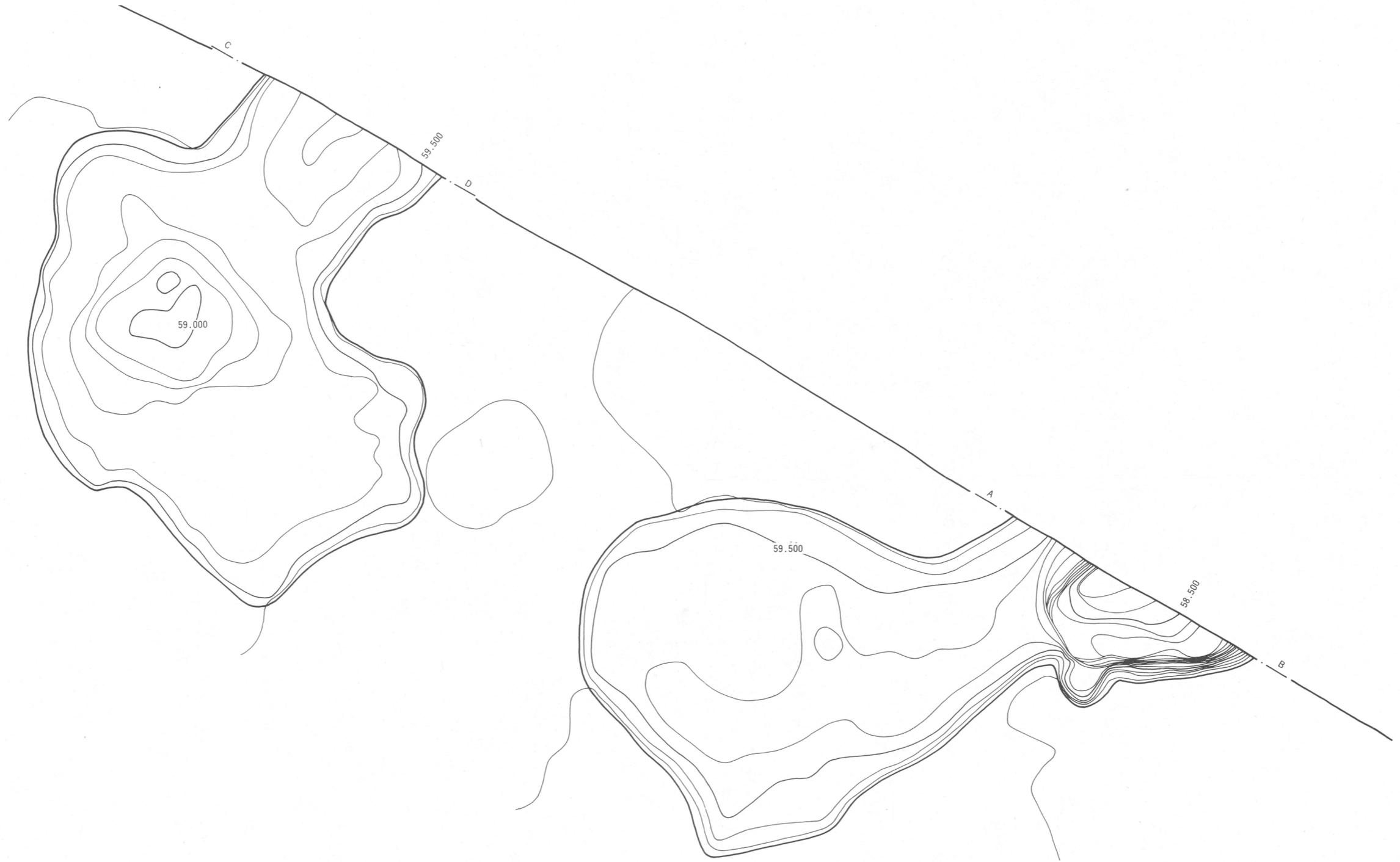
附図7 堂場6号墳



附圖 8 堂場 7 号墳



附图9 堂場8号墳



附図10 堂場9号墳